**第五章　トーラーを取るかメシアを取るか？**

**１知恵文学における「聖霊」としての「知恵」**

この章では、イエスが聖餐を通していかに復活したかを論じる前に、イエスがどうしてメシア（ギリシア語でキリスト、救世主）であり、復活に値する程の聖なる存在であると言えるのかを考えてみたい。

まずユダヤ教では当時、どういう形で救済が説かれていたのか知っておく必要がある。そしてそれに対置してイエスはどんな救済のイメージを提供したのかを考えよう。

『旧約聖書続編』と呼ばれているユダヤ教徒の宗教書群が存在する。一世紀末にユダヤ教で正典目録を定めるときこれらは受け入れなかったのが、キリスト教がこれらを伝えてきた。それ故ユダヤ教の『バイブル』には含まれていない。しかしこれらこそ紀元前後のユダヤ教徒の信仰を最もよく伝えているのだ。これらは紀元前から紀元後一世紀にかけて四世紀間に成立したものである。

『旧約聖書』の他の部分に比べて宗教書としての価値が劣るかどうか議論があるところだが、イエスの時代におけるユダヤ教の信仰の特色を最もよく伝えていることは確かであろう。

『旧約聖書続編』の中で、教義の内容を伝えているのが「知恵の書」「シラ書（集会の書）」「バルク書」である。「バルク書」は序言では、バビロニア捕囚の五年目にバビロンで書かれたことになっているが、内容的には紀元四○年前後に成立した「知恵の書」、紀元前一九○ー一八○年の「シラ書（集会の書）」と同じ知恵の賛美になっているので同時期のものとされているのであろう。

ここでいう「知恵」は人間の浅はかな知恵ではなく、「神の知恵」=「真理」のことである。「知恵の書」第一章で「知恵」は「聖霊」であるとされている。しかしイエスに宿った意味での聖霊とは全く異なっている。「知恵の書」の「知恵」は、神を畏れ敬うことを知っていて、律法を誠実に守ろうとする精神を、実体として表現するから「聖霊」なのである。だから「理性」と呼んだ方がぴったりするかもしれない。イエスの場合、神の子として神から授けられた、悪霊を追い払うなど奇跡を行う能力である。

**「知恵は悪を行う魂には入らず、罪のとりこになっている体には住み着かない。人を教え導く聖なる霊は、偽りを避け、愚かな考えからは遠ざかり、不正に出会えばそれを嫌う。知恵は人間を慈しむ霊である。しかし神を汚す者を赦さない。神は人の思いを知り、心を正しく見抜き、人の言葉をすべて聞いておられる。**

**主の霊は全地に満ち、すべてを司り、あらゆる言葉を知っておられる。」(第一章）**

「知恵の書」第七章にも知恵は霊として表現されている。  
  
**「知恵には、理知に富む聖なる霊がある。この霊は単一で多様で、軽妙な霊、活発で、明白で、汚れなく、明確で害を与えず、善を好む、鋭敏な霊、抵抗し難く、善を行い、人間愛に満ち、堅固で、安全で憂いがなく、全てを成し遂げ、全てを見通す霊である。この霊はほかの理知的で、純粋で、軽妙なすべての霊に浸透する。… … …」**

**２愛知者に与えられる知恵**

智恵は、神から授けられるとしているが、だれもがこの知恵に与れるわけではない。知恵を求め、知恵を愛する心に神からの知恵が届くのである。ではどうしたら知恵を求め、知恵を愛するようになるのだろうか？「シラ書（集会の書）」では、神を畏れることが知恵の出発点だとしている。だって、神への信仰がなければ、神からの罰や審判などは知る必要はないのだから。知恵を求め、知恵を愛する必要もないわけである。神を畏れる人は、神が与えてくれる知恵なしでは、とても恐ろしくて生きていけない筈だからである。

もし神への信仰がなければ、神が与えてくれる真理を正しいものとは思えなくなってしまう。そうすると人間たちは自分で真理を見いださなければ、安心して生きていくことができない。たとえアダムとエヴァ（イブ）が禁断の木の実を食べて善悪を知るようになったとしても、その結果、人々はそれぞれ自分が真理だと考えることに固執して、互いに争うようになってしまったのである。

つまり、人間は自分の力で知恵（神の知恵）に到達できないわけである。唯一絶対の神が実在するのなら、唯一絶対の真理の体系は神の傍らに最初からあった筈であるというのだ。あるいはエデンの園の「二つ木」が神の本体とすれば、神は永遠の生命であると共に知恵なのである。「シラ書（集会の書）」第一章には

**「すべての知恵は主から来る。主と共に永遠に存在する」「知恵は、他のすべてのものに先立って造られ、その悟る力も久遠の昔から存在している」**

と記された。しかし有限存在の人間がその内容を知ることはできないと「知恵の書」第九章は、ソロモン王の祈りの形で主張する。

**「だが、神の計画を知り得る者がいるでしようか。主の御旨を悟りうる者がいるでしょうか。死すべき人間の考えは浅はかで、わたしたちの思いは不確かです。朽ちるべき体は魂の重荷となり、地上の幕屋が、悩む心を圧迫します。地上のことでさえかろうじて推し量り、手中にあることさえ見いだすのに苦労するなら、まして天上のことをだれが探り出せましょう。あなたが知恵をお与えにならなかったなら、天の高みから聖なる霊を遣わされなかったなら、だれが御旨を知ることができたでしょうか。こうして地に住む人間の道はまっすぐにされ、人はあなたの望まれることを学ぶようになり、知恵によって救われたのです。」**

ここでいう「天の高みから聖なる霊を遣わされ」るということは、天からの啓示を意味する。神は各預言者に神の言葉を授けたのである。これが神の「御旨」であり、具体的には「トーラー」である。「トーラー」は現実に万人に明らかにされており、だれでも学ぶことができるわけだ。そして「トーラー」に従っていれば救われるわけである。しかし神を畏れ敬おうとしなければ、トーラーを学び、従おうとしないので、唯一の真理から離れ、罪におちて救われないのである。

**３宗教的愛知主義とその分岐**

「知恵の書」は、ソクラテスの「無知の知」の宗教版である。ソクラテスは、独断論を「無知の知」を生む産婆術で破綻に導き、ゼロからみんなで普遍妥当的な真理を積み上げていこうとしたのである。「知恵の書」は「無知の知」の自覚から、真の知恵は人間からでなく神からくるから、トーラーを学び、トーラーに従って生きることが幸福をもたらすとしているわけである。

「御旨」という言葉で表現し、敢えて「トーラー」にしなかったところに、「知恵の書」の時代の工夫と苦悩があるのだろう。トーラーだと「律法」的に字句通り、きちんと遵守することが救済の条件のように受け取られてしまう。しかし各時代によってイスラエルの社会にも変遷があり、遵守すべきトーラーの内容も変化せざるを得ない。あるいは内容は同じでも重点は変化する。大切なことは、神が主であり、イスラエルは神の奴隷であることを確認することなのだ。

その意味でトーラーの内容も、精神的な意義を明確にして、精神面を引き継いでいき、実際の運用にあたっては、弾力的に運用することが大切である。太古に初子を神に捧げるトーラーがあったとしても、実際の運用では、レビ族を神に奉仕させることでこれを贖い、レビ族の人数が足らない場合は、贖い金で神に了解してもらうのである。

そこで神の知恵を求め、愛する宗教的愛知主義にたって「知恵の書」は、神の知恵によって歴史的にどれほど素晴らしい恩恵がもたらされ、神の知恵であるトーラー秩序に背いてきた人々が、どんなに間違った迷信に陥っていて、その結果どんな災いを被ってきたのかを展開している。

だからこの宗教的愛知主義は、現実には二つの方向に分岐せざるをえないのである。一つは知恵をトーラーとして受け止め、トーラー主義を徹底するファリサイ派である。もう一つは「知恵」として理性的、精神的な面を重視し、個々のトーラーに捕らわれず、全てのトーラーと預言者を「神への愛と隣人への愛」に還元してしまうイエスの立場である。

イエスとソクラテスの立場は近いのだ。トーラーは既に確定し、客観的な精神として固定された知恵である。この知恵は神の知恵としては真理として固定されてしまっている。しかしそれが真理であるのは、一定の歴史的社会的な条件のもとである。それが変化すれば、そのトーラーは主観的な精神に還元しておかなくてはならない。

例えば安息日のトーラーがある。これを厳密に守り過ぎると、安息日に行き倒れになった旅人を見殺しにすることになる。もっと極端な例では安息日に敵に攻め込まれ、戦うことができなかったので、多くの犠牲をだしたことすらあるわけだ。そうすると安息日のトーラーの精神的意義は何で、従って最低限守るべきものは何かを考え直さなければならない。  
  
　イエスは「安息日は人間のためにある」 として、魂の医者としての活動を安息日でも行ったわけである。イエスは固定化（実定化）したトーラーに懐疑を投げかけ、無知の知の自覚に導いた。まるでソクラテスである。そこで普遍妥当的な知の出発点としたのが「神への愛と隣人への愛」である。

ただしそこからトーラーの今日的体系を構築するという方向にはいかなかったのである。だからトーラーによって社会的秩序を守っているユダヤ人社会では、イエスはトーラー秩序の破壊を説く危険分子として警戒されてしまったのである。

**４トーラーの呪い**

「知恵の書」などのユダヤ的愛知主義は、大枠ではトーラー主義の範囲内にある。やはりトーラーによる救済を説いているからだ。しかし、トーラー主義には根本的な欠陥がある。ひとつは神の独断論であり、その強引な恐怖的支配による押しつけである。唯一絶対の超越神論が正しく、多神教的な自然神信仰やそれに基づく偶像崇拝が誤りだということは、十分には説得力がない。従って、そういう真理観に基づく異民族に対する侵略やホロコーストには無理がある。どうしても内部から不信仰が起こり、トーラーが蹂躙されることになるのだ。

そしてトーラーの自己矛盾からくる実現不可能性もある。安息日のトーラーと隣人愛のトーラーは、両立しない。安息日に行き倒れの旅人に会っても、これを助けると安息日のトーラーに抵触し、助けないと隣人愛のトーラーに抵触する。そこで抵触しないように家に籠っていると、トーラーの形式的成就自体が自己目的になって、愛に生きるための知恵からは遠ざかってしまう。

元々トーラーは、より善く生きるための知恵であり、神が「神への愛と隣人への愛」に生きるように、そこから外れないように示した目安に過ぎない。ところがトーラーの成就が救済の条件のように言われ、トーラーをきちんと守らなければ、恐怖の審判が待っていたり、守れば楽園が約束されていたりすると、より善く生きるためではなくて、利己的な目的の為にトーラーを守っているというのが実態になってしまう。

だとすると利己的な目的で隣人愛の実践をしても、それは偽善にすぎないのだ。つまりトーラーを守ろうとする行為自体が、神への欺瞞であり、それこそトーラーを最も乱暴に蹂躙していることになってしまう。そのことに気づいたイエスは、トーラー主義自体がユダヤ人を罪に導き、ユダヤの解放が成就しない原因だと考えたのである。

イエスはこの「トーラーの呪い」からユダヤを解放することによって、「神への愛と隣人への愛」に生きることができるようになると考え、そこに真の意味でのトーラーと全預言の成就をイメージしたのだ。

イエスはこう考えた。これこそ救済ではないか、その方法を思いついた自分こそメシアであると。イエスにはメシアの自覚が生じたのである。そうなるとトーラー主義への批判はラディカルなものにならざるを得ない。「福音書」の「山上の垂訓」を検討して、イエスの説教のテーマを捉え返してみることにしよう。

**５「幸いの説教」とあべこべ原理**

「山上の垂訓」は「幸いの説教」から始まる。「マタイによる福音書」からの引用は既にしたので、ここでは「ルカによる福音書」からの引用をしておこう。

ただし、「ルカによる福音書」では山から降りて平地で話したことになっている。これは「マタイによる福音書」の著者が、イエスがいと高き所から説教したことにした方が、聖なる説教に相応しいと考えたからであろう。

**「貧しい人々は、幸いである。神の国はあなたがたのものである。**

**今飢えている人々は幸いである、あなたがたは満たされる。今泣いている人々は幸いである、あなたがたは笑うようになる。**

**人々に憎まれるとき、また、人の子のために追い出され、ののしられ、汚名を着せられるとき、あなたがたは幸いである。その日には喜び踊りなさい。この人々の先祖も、預言者たちに同じことをしたのである。**

**しかし、富んでいるあなたがたは不幸である。あなたがたはもう慰めを受けている。**

**今満腹している人々、あなたがたは不幸である。あなたがたは飢えるようになる。**

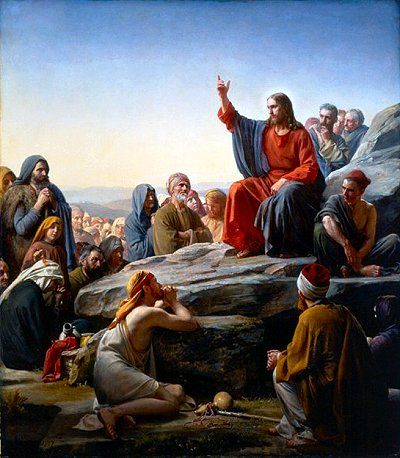
**今笑っている人々は、不幸である。あなたがたは悲しみ泣くようになる。**

**すべての人々にほめられるとき、あなたがたは不幸である。この人々の先祖も、偽預言者たちに同じことをしたのである。」**

マタイ・マルコ・ルカの福音書を総称して共観福音書というが、私は昔、教会で、それはイエスの言行についての三人の使徒の証言であり、その内容が一致しているので、イエスの事蹟が実際にあった事実だと確かめられるという説明を受けたことがある。

しかし最近の聖書学によれば、最もべースになった「イエス語録」があって、それに基づいて「マルコによる福音書」が書かれ、それらを参考にマタイやルカの福音書も書かれたというのが真相らしい。

そして使徒の名前があるけれど、実際に使徒によって書かれたものでもないという説が有力になっている。「幸いの説教」に関して、かつてマタイの「心の貧しい人々」は「貧しい人々」の改鼠ではないかという改竄論争があった。

これはイエスが「貧しい人々」の解放の立場から言った言葉だったのに、富裕階級の人にも受け入れられるようにマタイが「心の貧しい人々」に勝手に変更してしまったという議論である。とはいえ、「心の貧しい人々」という意味を精神的に二つの愛にだけ生きているような単純な人が、神に歓迎されるという意味で受け止めれば、マタイの解釈でも意義があるわけだ。

しかし「山上の垂訓」全体はまことに逆説的な説教になっていて、その意味からは、「あベこべ原理」が徹底している「ルカによる福音書」の方が原型に近い可能性が高いだろう。本章のテーマである「トーラーを取るかメシアを取るか」との関連でみれば、「貧しい人々は、幸いである。神の国はあなたがたのものである」という言葉は実に衝撃的な言葉である。  
  
　「アム・ハーレツ（地の群れ））と呼ばれた「貧しい人々」あるいは「賤しい人々」はトーラーを遵守することに関しては、みんな絶望していた。トーラーを遵守するには『バイブル 』のモーセ五書についての詳しい知識が必要で、文字も満足に読めないアム・ハーレツにはトーラーの内容についての知識が十分でなく、遵守するにもできない。

それに貧しいため、「賎しい」ために安息日に働かないといけないこともあるし、生きる為にはきれいごとですまない場合も多い。罪のない者だけが石を投げろといわれて、だれも売春婦や徴税人に石を投げつけることのできるものはいないのだ。

その点、トーラーに関する豊富な知識を持ち、その遵守をとくとくと説教する富裕なファリサイ派の人々は、いかにもトーラーに忠実に生きているように見えた。アム・ハーレツにすれば、罪に堕ちている自分たちに、神の救いなどあり得ないと思い込まざるを得なかったのである。

そこに「貧しい人々は、幸いである。神の国はあなたがたのものである。今飢えている人々は幸いである、あなたがたは満たされる。今泣いている人々は幸いである、あなたがたは笑うようになる」「しかし、富んでいるあなたがたは不幸である。あなたがたはもう慰めを受けている。今満腹している人々、あなたがたは不幸である。あなたがたは飢えるようになる」というイエスの「あべこべ原理」の説教が飛び込んできたのだ。

「貧しい人々」あるいは「賎しい人々」は何も悪意でトーラーを守らないわけではない。もしファリサイ派のように富裕な境遇にあれば、トーラーを遵守できたのにという思いがある。

神はわけへだてない愛を注ぐとすれば、今貧しくて飢えに苦しみ、泣いている人々、いずれは救われる筈なのだ、逆に富んで満腹している人々は、いずれは飢え悲しまなければならない筈である。現世においてずっと富み栄えていたら、神の国では最悪の筈だ。なるほど、この説教は貧しい人々には、彼らの願望を代弁しているだけに説得力は抜群だ。もし神がいて、それが偉大で正しい存在なら、全くイエスの言われる通りとしか考えられないというのが、貧しくて賎しいとされた人々の正直な気持ちであった筈である。

トーラーの遵守によって、神の国が保証されるというファリサイ派の説教は、よく考えると貧しい人々をこけにした議論である。それなら貧しくて賤しいとされた人々は現在も将来も、現世でも来世でもずっと悲惨でしかありえないということになってしまう。そんな無情な神ならいない方がましだ。イエスは神はそんな無情な存在ではないと言ってるんだ。イエスこそわれわれの希望の星だ。ひょっとしたら本当のメシアかもしれない、とアム・ハーレツは胸を熱くして聴いたのだ。そのとき山中がどよめくような歓声で包まれたとしても不思議ではない。

**６トーラーの廃止ではなく完成**

「ルカによる福音書」にはないのだが、「マタイによる福音書」第五章 17節～20節にはこの説教が、トーラー否定の趣旨ではないと言い訳をする「律法（トーラー）について」という説教が入っている。いかにも言い訳っぽいし、「ルカによる福音書」にはないのだから、これは「マタイによる福音書」の著者が、保守的な立場から加筆したと解釈する聖書学者も多い。

**「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだと思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである。はっきり言っておく、すべてのことが実現し、天地が消えうせるまで、律法の文字から一点一画も消え去ることはない。だからこれらの最も小さな掟を一つでも破り、そうするようにと人に教える者は、天の国でも最も小さな者と呼ばれる。しかし、それを守り、そうするようにと教える者は、天の国で大いなる者と呼ばれる。言っておくがあなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の国に入ることはできない。」**

「マタイによる福音書」の著者が、保守的な立場から加筆した可能性ももちろんあるのだが、本章の問題意識に沿って逆説的な表現だと解釈しておこう。「律法や預言者」というのは、何の為に存在したのかというと、人々が愛に生きることができるために存在してきた筈である。だから個々のトーラーの内容や預言の内容は素晴らしいことが多い。たとえ些細な、枝葉末節のことであっても、常に神の知恵であるトーラーを尊重すべきであることはいうまでもないのだ。

しかしトーラー至上主義になり、トーラーを守ることばかりにこだわっていたら、かえって肝心の神への愛や隣人への愛を忘れてしまうことになる。それでは義において劣ることになってしまうのだ。

律法学者やファリサイ派の人々の義は、肝心の愛を忘れ、個々のトーラーの文字に呪縛されてしまっているのである。それに比べてイエス教団の義は、二つの愛の実践という観点から、トーラーの精神を活かす為に必ずしもトーラーの字句には囚われない態度で、トーラーを実践しようとする義なのだ。そういう意味でイエス教団の義はファリサイ派の義にまさっているのである。

**７トーラー主義の戯画化**

そこでトーラーを真に成就するということは、トーラーの精神を生き抜くということになる。トーラーの遵守によって救われるという立場を純化していけば、トーラーの精神を徹底して生き抜かなければ救われないということになってしまう。そこでイエスはトーラーをその精神において徹底的に先鋭化した形で呈示し、これが守られなければ、ゲへナの煮えたぎる血の河で苦しめられるぞ、と脅かしている。

審判は楽園かゲへナ（地獄谷）かの二者択一と思われていたのだ。だからこれはトーラー主義を戯画化しているのである。神は決してそんな極端な形で実践できないと救わないとは言ってないし、トーラーを字句通り実践しなければ救わないとも言っていない。神の言いたいことはそんな事ではないのだ。愛に生きる為に神の知恵であるトーラーの精神に学んで誠実に生きなさい、その姿を神は愛されるのだ。

救われるとか、救われないとか、そんなことを心配しても実は始まらない。心から神を愛し、神の愛を信じていれば、素晴らしい愛の充実した人生がおくれるし、相思相愛の神が自分に仇をなすのではないかという心配など無用なのである。

次に「マタイによる福音書」第五章 21節～37節を要約しておく。

**「殺人が裁きを受けるのなら、兄弟に腹を立てたり、馬鹿と言ったり、愚か者と言っても地獄行きだ。トーラーで姦淫するなと言うが、みだらな思いで女を見る者は目で犯している、だったら目玉を挟りだした方が、地獄へおちるよりましだ。妻を離縁する者は妻に姦淫させることであり、離縁された女を妻にするのは姦淫だ。偽りの誓いを立ててはならないというが、人間自分の思いどおり出来ることはないのだから、一切の誓いは偽りの誓いなので誓いを立ててはならない。」**

この話を聞いて「『愚か者！』と言っても地獄行き」を本気で信じて、人に絶対に「馬鹿！」とか「阿呆！」とか言わなくなった人がクリスチャンにはいるようだ。「馬鹿！」とか「阿呆！」とか言わないのはいいことなのだが、もし「地獄行き」が恐ろしいから「馬鹿！」とか「阿呆！」とか言えなくなったとしたら、それはイエスに対するとんでもない誤解である。

兄弟喧嘩でカインがアべルを殺してしまった。兄弟は仲良くすべきだということが神の御旨ならば、殺人はもっての外だが、腹を立てたり、馬鹿呼ばわりしても、神の御旨に背いているから、地獄行きかもしれない。だから神の御旨に従って腹を立てないように心掛けなさい。とはいっても神を恐れて喧嘩をしない、仲良くするというのでは、本当に兄弟愛があるとは言えない。

だからむしろトーラーによって救われるか、救われないかにこだわる事自体が、神の御旨に叶っていないのだ。そんなことは気にせず、神の知恵であるトーラーを感謝して受け取り、愛に生きるために活かそうとすることが、トーラーを成就することなのである。

最近のアメリカにおけるセクハラ裁判は、「みだらな思いで女を見るものは目で犯している」という論理に近いものがあるようだ。しかしそれなら、そんな目は挟り出した方がよいのか。

**「もし右の目があなたをつまずかせるなら、挟り出して捨ててしまいなさい。体の一部がなくなっても、全身が地獄に投げ込まれない方がましである。もし右の手があなたをつまずかせるなら、切り取って捨ててしまいなさい。体の一部がなくなっても、全身が地獄に落ちない方がましである。」（29節～30節）**

これは痛烈な逆説である。トーラーで姦淫は死刑だとすると、神はみだらな目で女を見るのもふしだらな奴だと思われるから、地獄行きかもしれないぞ、おまえはスケべだから地獄に落ちないように目玉をえぐりとっておいた方がいいという趣旨である。

イエスにこんなことを言われても、本気で自分の目玉を抉った者はいないだろう。トーラーによって救われるかどうか、地獄行きか天国行きか、そんなことを気に病んで戦々恐々と生きることが、そもそも神の御旨とはかけ離れているのである。確かに、いやらしい目で女を見ない方がいいけれど、それは地獄に落ちない為にではなくて、その女の夫婦関係、他人の家庭を尊重し、互いに隣人愛で結ばれる為にそう心掛けるべきなのである。

離縁についても、離縁状を渡せば離縁できるとトーラーに書いてあるからといって、離縁自体は神の御旨ではない。神が取り結んだ結婚なのだから、互いに理解し合い、助け合って、最後まで添い遂げるのが正しいのである。しかし、これも離縁は姦通だから地獄行きと考え、それが恐ろしいから離縁しないというのはだめなのである。神の裁きを恐れて、愛の無い、憎しみだけの結婚を続けるよりも、離縁した方がいい場合もあるわけで、イエスも「愛なき結婚」についての離婚を認めている。

「神かけて誓ったことは必ず果たせ」というトーラーがあるが、そもそも誓いを立てるということ自体がイエスに言わせれば、人間の思い上がりであり、瀆神(とくしん)なのである。というのは、必ずこうするというようなことをいうのは、人間が未来を決定できるということになるが、自分の髪の毛の色も全て神が決めることで、自分では決定できないのだから、誓いを立てる事自体が間違っている。だから人間は事実判断で、イエス・ノーを言うのはいいが、将来を約束するようなことは慎まなければならないのだ。

例えば、君を幸せにすると約束して結婚しても、様々な事情でいろんな苦労をかけたり、悲惨な生活に陥ったりすることになるかもしれない。だから余計な約束は無責任なのである。

それはさておき、ここでトーラーとの関連で言えば、トーラーで誓いを果たせとあるから、誓いを果たさなければならないというわけではないということである。誓いなど元元、神からみれば不遜なのだ。だからこれもトーラー主義への皮肉な批判なのである。

**８右の頬を打たれれば、左の頬を出せ**

さていよいよ次が有名な「右の頬を打たれれば、左の頬を出せ」という格言の箇所である。これをトーラー主義批判として解釈したらどうなるのか。

**「あなたがたも聞いているとおり、『目には目を、歯には歯を』と命じられている。しかし、わたしは言っておく、悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。あなたを訴えて下着を取ろうとする者には、上着も取らせなさい。」（38節～40節）**

トーラーでは同等報復が正義なのである。つまり過剰に報復してはならない、トラブルが拡大して、世の乱れを招くからである。例えば殴られた腹いせに相手を刺し殺したら、相手の家族が刺し殺した者の家族を皆殺しにするだろう。そしたらその被害者の親類縁者が相手の村や町ごと火にかけてしまうことになる。

一発殴られたから一発殴り返したとすれば、それは当人どうしの関係で収まりがつくのだ。しかし真の平和や隣人愛の関係を築こうとするなら、同等報復も正しいとは言えない。やはり殴ったり殴られたりする関係は続くからである。殺したり殺されたりもだ。

相手の敵意を喪失させ、自らの不正や暴力を反省させるには、「右の頬を打たれれば、左の頬を出せ」というのが一番である。そして相手に憎しみでなく愛を注ぎ、欲しがるものを与えればよいのである。そうすれば相手は自分を憎むことができなくなり、愛するしかなくなるのだ。まことにお人好しの論理だと笑われるかもしれないが、イエスは惜しみなく愛を注ぐことによって隣人愛を実現できると考えていた。その意味で遠藤はイエスを「愛の同伴者」と呼んだのである。

トーラー主義への批判としては、同等報復は神の御旨に沿っていない、報復をしないで相手を愛してはじめて神の御旨に叶っているのである。その意味では同等報復をすれば、地獄行きかもしれない。

もちろんトーラーを守れば救われ、守らなければ救われないことにこだわって平和や人倫のことを考えていたのでは駄目なのである。真の平和、隣人愛の関係を樹立するにはいかに生きるべきかをイエスは問いかけているのである。

**９イエスの「愛の解放戦略」**

さらに「汝の敵を愛し、汝を迫害する者の為に祈れ」というキリスト教精神の核心ともいうべき格言が登場する。

**「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』 と命じられている。しかし、わたしは言っておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父（いと高き方）の子となるためである。父（いと高き方）は悪人にも善人にも（恩を知らない者にも悪人にも）太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。**

**自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあろうか。徴税人でも同じことをしているではないか。自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになろうか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか。だからあなたがたの天の父が完全であられるように（憐れみ深いように）、あなたがたも完全な者（憐れみ深い者）となりなさい。」（43節～48節、カッコ内は「ルカによる福音書」）**

トーラーで「隣人を愛し、敵を憎め」とあるが、それに忠実なら御旨に叶うだろうか。イエスの考えでは、神は人類が敵味方に分かれていつまでも憎しみ合い、争うことを望んでいる筈がない。自分の家族や友達、自分の味方になってくれる人達を愛するのは当たり前で、それは民族の裏切り者の徴税人でもやっているのだ。大盗賊団の頭目だって「仲間を愛し、敵を憎」んでいるのである。

だったらトーラーを守っていても、天の国に入れてもらえないことになる。「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈」ってこそ、相手の敵意を喪失させることができるのである。キリスト者を弾圧し、迫害しようとしていたローマ帝国は、結局キリスト教を国教として受容せざるをえなくなったのである。

パウロは熱心なユダヤ教徒で、キリスト教を憎み迫害していた。ところがキリスト教徒たちは、パウロを恨むことなく、逆に隣人愛でパウロを愛し、パウロの為に祈ってくれたのである。パウロは熱心なユダヤ教徒であり、キリスト教弾圧に誠実に取り組んでいたからこそ、鞭打ち迫害する自分を愛そうとするキリスト教徒を憎みつづけることが出来なくなったのである。

次第にキリスト教徒への愛が自分の中に育っていって、そこまで人間を変える力をもったイエスに強く惹かれていったのである。

これがイエスの愛の解放戦略だったのだ。ユダヤは小さな国でローマを敵に回して、武力的に解放するのは無理である。民衆はイエスがユダヤの王となり、ローマの支配からユダヤを解放してくれると希望したのである。しかしイエスは**「カエサル（皇帝）のものはカエサルに返せ、神のものは神に」**と説き、ローマの支配に服従をすすめ、武力で反抗することをたしなめたのである。

これは民衆がイエスに幻滅する原因の一つになってしまった。イエスの考えでは、武力で戦おうとするからローマに負けるのである。「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈る」ことによって、ローマ人に対してキリスト教徒は精神的優位性を示すことができるのだ。それがやがてローマ人の戦意を喪失させ、キリスト教徒の愛に巻き込むことになる。そうすればキリスト教がローマの国教となることができるわけで、それがイエスの愛の解放戦略なのだ。

ここでもトーラーを固定し、それに固執するだけでは、救われないことがわかる。そのトーラーのせいで国が滅亡することにもなりかねないのである。つまり愛に生き、愛によって解放を勝ち取ることを考えなかったら、ユダヤを守ろうとするトーラー自体が成就されなくなる。そればかりかユダヤにローマ帝国の支配下で解放戦争を挑発し、ユダヤは世界中にディア・スポラ（離散）させられるきっかけになったのである。

**10求めよ、さらば与えられん**

かくしてイエスはトーラーを文字通り遵守することが、救済の保証ではなく、トーラーとして示された神の知恵を、愛に生きる生活の中でいかに活かすかが大切だとしたのである。トーラーを字句通り遵守することが元々無理なアム・ハーレツにとって、これは最も素晴らしい教義であったに違いない。

とはいえ貧しい人達が、様々な苦難の中で生き抜いて行くためには、何の負い目もなく、過ちや罪も犯さず生きていくことは難しい。だから精一杯誠実に愛に生きた上で、犯した罪や過ちは素直に神の前に懺悔して、ひたすら許しを請うしかないのである。

そこでイエスはアム・ハーレツの為に「主の祈り」を教えた。「マタイによる福音書」第六章 9節～13節である。

**「天におられるわたしたちの父よ、御名が崇められますように、御国が来ますように、御心が行われますように、天におけるように地の上にも。わたしたちに必要な糧を今日与えてください。わたしたちの負い目を赦してください。わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように。わたしたちを誘惑に遭わせず、悪い者から救ってください。」**

この「主の祈り」を、現在でも躾の行き届いた、熱心なクリスチャンの家庭では食事の時には、いつも皆で唱えることになっている。

ここではトーラーを守ることによって救済されるのではなく、あくまで神への信仰と、神の支配の実現を祈り、自分たちを守って必要な日用の糧を与えてくれることを願い、負い目や罪を許してくれるように祈っているのだ。

つまり神への祈りで、神の愛の力で救済されるのである。だからもうこれだけのトーラーを守り、善を積んだから、成績として加点してもらおうというようなトーラー主義を排し、神の力で罪を許し、悪の誘惑から守って欲しいとひたすらお願いしているのである。

この福音書の「主の祈り」には「アーメン」がない。ということは、イエス・キリストを通してでなく、直接神にお願いしているのだ。教会や家庭では「主イエス・キリストの御名を通して、お願いします、アーメン」が必ず入るのである。直接神にお願いしてもいいのだが、キリスト者は教会に属していて、教会で主イエス・キリストの体に属しているわけなので、主イエス・キリストの御名によることが筋になっているのだ。

だから「山上の垂訓」の表現では、まだトーラーによる救済から、イエスの媒介を経ない神の御力による救済に重点がある。つまり自力的要素のあるトーラー主義的信仰を脱皮して、純粋な他力信仰へと移っているのだ。そこで神への感謝と愛に生きているなら、神が必ず日用の糧を与えてくれるので、**「明日のことは思い悩むことはない」**としている。

そして自分にも負い目はあるのだから**「人を裁くな」**と言っている。そして**「求めよ、さらば与えられん 」**として、神の御力に頼って生きることを説いているのだ。これは自分に与えられる物をすべて神の賜物と捉え、神が自分の求めた物を与えてくれたように、神を見習って求められるものを人に与えればよいということになる。

**「だから、人にしてもらいたいと思うことはなんでも、他の人にもそのようにしなさい、これが律法と預言者である。」（第七章 12 節）**これこそ要するに神に感謝し、神を信頼して生きていれば、神は与えてくださるわけだ。何故ならそういう人は、人から求められるものは何でも人の為につくそうとするので、人々から感謝され、信頼されているからである。そういう人はみんなが大切にして、日用に必要な物を欠かせるようなことはないということである。

**11メシアの自覚と人間イエス**

イエスは「山上の垂訓」では、メシアによる救済を説かなかったけれども、ファリサイ派は、トーラーによる救済を原理的に否定したイエスの態度に衝撃を受ける。

その上、イエスは魂の医者として、自らに宿っている聖霊の力で悪霊払いの治療行為を行っている。だから両者をドッキングさせると、トーラーによる救済に代わって、メシアによる救済を説こうとしていると受け止めざるを得なかったわけである。

イエスは「トーラーの呪い」を解き、愛の解放戦略を抱いていたから、自分がメシアだという確信をもっていた。これはしかし教義の上でのメシアである。このような教義の上でのメシアに徹すれば、復活信仰は出てこない。

精神的な教義の継承を弟子が行えばよかったのである。しかしイエスは同時に、聖霊を宿す聖なる肉体であった。教義を革新できたのも、聖霊のせいかもしれないとイエスが感じたとき、イエスは地上における神の代理人になり、神に代わって審判まで行えるつもりになったのかもしれない。

福音書の中で、聖霊による奇跡的救済、永遠の命を中心に説いているのは、最古の「マルコによる福音書」と最新の「ヨハネによる福音書」である。

人間イエスを強調する潮流がある。つまり後のキリスト教団によって神格化される前の、イエスの原像を明らかにしようとする潮流だ。あの「心の貧しい人々」の「心の」が改鼠だというところから始まって、「マタイによる福音書」の保守的体制的性格を暴き、貧しい人々の解放という立場から人間イエスの苦闘を再現しようとする傾向である。

彼らによると、現存しない「イエス語録」がまずあって、それを基礎に「マルコによる福音書」が書かれ、両者を基礎に教団の布教の狙いをこめて、聖霊による処女マリアの懐妊などいろいろ神格化の手を加えた「マタイによる福音書」や「ルカによる福音書」が書かれたということになり、どちらかといえば、現存のものでは「マルコによる福音書」に最も原像に近い「人間イエス」が垣間見られるとしている。

では実際「マルコによる福音書」には、神格化されない生の人間イエスの生き様や苦悩が描かれているのかと思って読んでみると、聖霊による悪霊払いのオンパレードである。「山上の垂訓」のような胸を熱くさせるものもあまりない。

聖霊による救いを強調する立場は、「トーラーを取るか、メシアを取るか」でメシアを取るという立場に近いから、「マルコによる福音書」が特に人間イエスの原像を示しているとは、とても読み取れない。

**12権威ある者として語る**

「マルコによる福音書」ではイエスは、ガリラヤの故郷ナザレを離れ、ヨルダン川でバプテスマのヨハネのバプテスマ（洗礼）を受けた。その時、**「天が裂けて霊が鳩のようにご自分に降って来るのをご覧になった。すると『あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者』 という声が天から聞こえた」（第一章 ９節～11 節）。**

この降霊体験が出発点になり、霊に導かれて荒れ野で四十日間修行をし、すっかり聖者になって、ガリラヤで**「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」**と福音を始める。そして四人の漁師を弟子にし、カファルナウムのシナゴーグ（会堂）で律法の解説をする律法学者のようにではなく、権威ある者として教えたので人々は非常に驚いたという。

権威ある者とはつまり聖者のように教えを説いたということだ。これまで会堂ではファリサイ派の説教師が神の示したトーラーであるモーセ五書（創世記・出エジプト記・レビ記・民数記・申命記）を読み上げ、それを実生活にどう適用するかを解説していたのであろう。ところがイエスは既成のトーラーによらないで、自らが聖なる言葉を語る者として教えを説いたのである。

日本の哲学者は、外国の権威ある哲学者の学説を紹介・解説して、哲学を教えたつもりになっているが、自分自身の哲学を展開しようとしない。西田幾多郎は、西洋の従来の哲学を凌駕するような自分の哲学を創造し、それを自分の言葉で展開したが、これなど希有な例である。

もちろん聖者ぶった態度は、普通なら顰蹙を買う。日本哲学会などでも質問者の中に突拍子もなく奇説を展開しだす御仁がいて、失笑を買って相手にされないことがある。その場合、彼は権威ある学説で武装しないで、自分の思いつきで語っているだけだからだ。

全くオリジナルな学説でいくなら、それを実証するような、あるいはその学説が巨大な哲学上の難問をみんなが納得できる形で解決するような衝撃的な内容を持っていなければならない。イエスの会堂での説教は、その内容は記されていないが、恐らく新鮮で説得力もあったのだろう。イエスは、自分が聖者として語っても、聖者だとする証を示さなければ、かえって排斥されると警戒していたので、会堂の中で悪霊払いの実演を行ったのである。

**13人間をとる漁師に成れ**

これは「ルカによる福音書」 から既に引用したが、この実演はまことに効果的だった。会堂の中で悪霊払いの実演には、弟子になったばかりのシモンとシモンの弟アンデレ、ゼべダイの子ヤコブとその弟ヨハネの四人の弟子が見事なチームプレイで活躍した筈である。

この四人は福音書ではいとも簡単に漁師の仕事を捨てて、イエスについてきている。「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われてすぐついて来ているのである。これはイエスが既に、聖者としての風格があったことにする為にこう書かれているのだろう。実際には巧みで粘り強い説得活動があった筈である。

おそらくイエスはこう語りかけたのではないか。「ガリラヤは悪霊に満ちている。人々は悪霊にとりつかれ、生きる喜びを失い、将来に希望を持てず、絶望にうちひしがれている。多くの人が悪霊のせいで足腰が弱り、目がかすれ、癩などの吹き出物に悩まされ、胸を病み、長血を患っている。

私はガリラヤから悪霊を追い出す為に神から聖霊を授かって、派遣された者だ。ガリラヤの悪霊は質（たち）が悪いから、一人で簡単には追い出せない。私が悪霊を追い出すためには、あなたたちの協力がどうしても必要なのだ。私が悪霊に出ていけというだけでは簡単には出ていかない。患者たちが自分には悪霊がついていて、聖霊を宿している魂の医者に悪霊払いをしてもらわないと治らないと確信していなければ効果はないんだ。そのためには、少しばかり工夫が必要だ。本当は目に見えない悪霊を人々に見せてやり、それが魂の医者の力で追い出されるのを目撃させてやらなければならないんだ。君達がその役を演じてくれれば、きっと人々は私の言葉を信じて、心を開き、悪霊を吐き出してくれるだろう、そうすることによって多くの人々が救われるようになる。」

こう言われても四人は、詐欺師の片棒を担がせられるのは真っ平だと断ったかもしれない。そこでイエスはもっと突っ込んで話した。

「悪霊がはびこっているのは、実は『トーラー（律法）の呪い』のせいなんだ。説教師たちは守りきれる筈もない、膨大で複雑なトーラーをお前たちに説き聞かせ、これが守れなければ、神の国に入れない、ゲへナの煮えたぎる血の河だぞといつも脅しをかけている。だから民衆は自分たちは惨めで罪深い存在だと思い込んでいる。心がこういう落ち込んだ状態になっていると悪霊がはびこり易いんだ。またそういう土地では悪霊のせいで植物も元気がなくなり、漁も豊漁にはならない。まずわれわれが悪霊を払って、人々が元気で伸び伸びと暮らせるようにしてあげなければならない。その為には、根本の原因である 『トーラーの呪い』から民衆を解放することが大切なんだ。

『トーラーの呪い』で民衆を絶望させ、悪霊の餌食にさせているファリサイ派の説教師たちをやっつけよう。そんな大それた事だと？考えてもみたまえ、人間は誰に造られたんだ。天のお父である神が自分に似せて造られたんじゃないのか。天のお父が、自分に似せて造った者をこんな悲惨で貧しい絶望的な姿のままに捨てておかれる筈はないんだ。

天のお父がトーラーをわれわれ人間の為に造られたとしたら、人間の幸せを願っている筈のお父が、トーラーでわれわれを苦しめるというのは理屈が通らないだろう。だがそう思い込ませる説教師たちの罪は深い。きっと天のお父は、神への愛と隣人への愛に生きることができるようにいろんな心遣いをされたんだ。だからわれわれ人間は、「神への愛と隣人への愛」に生きるためにトーラーを活かせばいいんのだよ。そのために字句通り守れなくったって、われわれが誠実に愛に生きる為にしたことなら、咎めたりはされない筈だ。

われわれは天のお父がわれわれを愛していて、決して見捨てたりしないことをもう一度信じようじゃないか。今君達が私についてくれば、ガリラヤだけでなく、全ユダヤがトーラーの呪いから解放され、聖霊に満たされることになる。そうすればその光が世界を照らすことになるのは間違いないんだ」とそこまでは言わなかっただろうが、漁師にも分かる言葉で切々と説得して感動を与えた筈である。ちなみにイエスは、親しみをこめて神を「天のお父」と呼んでいたらしい。

何故、漁師たちに白羽の矢が立ったのか、漁師たちが巧みな仕掛けをつくって、魚を捕らえているのを見て、これから人々の心を捉えようとしていたイエスは電気が走るような衝撃を感じたのだろう。ともかくこの出会いは世界史を大きくかえたのである。

**14悪霊役者の誕生**

「悪霊役者に成れ」と言われて、漁師が簡単に成れる筈がない。イエスはガリラヤの首都のセッフォリスの近くのナザレにいて、劇場の板張りの仕事をしていたということだが、ガリラヤ湖の周辺では片田舎でお芝居などあった筈もないと想像される。「偽証するなかれ」という十戒の言葉を素朴に守り、おそらく人を騙すことを知らない、純朴な漁師たちだったのだ。

それが悪霊にとりつかれた男や、その男にとりついた悪霊に成りきる事を要求されたのだ。そんな事は到底できっこないのである。しかしユダヤ人は世を救い、イスラエルに栄光をもたらすメシアの到来を待ち望んでいる。メシアが現れたら義の為に命を投げ出す覚悟はいつでもできているのだ。

ユダヤ人に関して守銭奴のイメージが強い。それは紀元後七十年に、ローマ帝国に対するユダヤ解放戦争に敗れて、故国を失って世界にディア・スポラ（離散）してから、金貸しや商業活動しかできなかった境遇からきている。

もっとも、イエスと同時代のエルサレムのファリサイ派の説教師たちも、表面ではトーラーを守って、義のために生きているように善人を装っているが、民衆であるアム・ハーレツ（地の群れ）にとっては悪辣な偽善者に過ぎなかったのだ。

民衆にしたところで、生きるためには罪を犯していたし、欲望の虜になって悪徳を働くこともあった。『バイブル』もユダヤ人を決して神の優等生として描いていない。むしろその反対に神を裏切り、父を裏切り、兄弟を裏切る神の放蕩息子である。つまり罪に陥りやすい民族なのだ。その結果幾度も厳しい神の裁きを受けている。ただユダヤ人はその結果を主体的に捉え返し、常に信仰の原点に帰って、自らの罪を懺悔し、義に生きなおそうとする自覚的な民族なのだ。そのような高い志はユダヤ人であれば、だれでも持っている民族性なのである。これは中国人の儒教精神と比肩し得るものである。

中国人も一見、自己一身の利益だけを追求する利己主義の固まりで、公共性など微塵も持たないという悪評を立てられることがよくあるが、それでも常に天下に仁義に基づく王道政治を打ち樹てる為に、立ち上がる覚悟は出来ているのである。彼らはいつも聖人・君子に憧れ、聖人・君子と自己を同一視し、聖人・君子の為に殉ずる覚悟があるのだ。

イエスの説得にあってシモン・ペトロ達は、自分たちがもう数百年も前から待ち続けていたメシアに巡り会えたと思ったのだ。何故なら、イエスがはじめて貧しい人こそ救われると説き、トーラーの呪いを解いてペトロたちの魂に深く届く言葉を語ったからである。

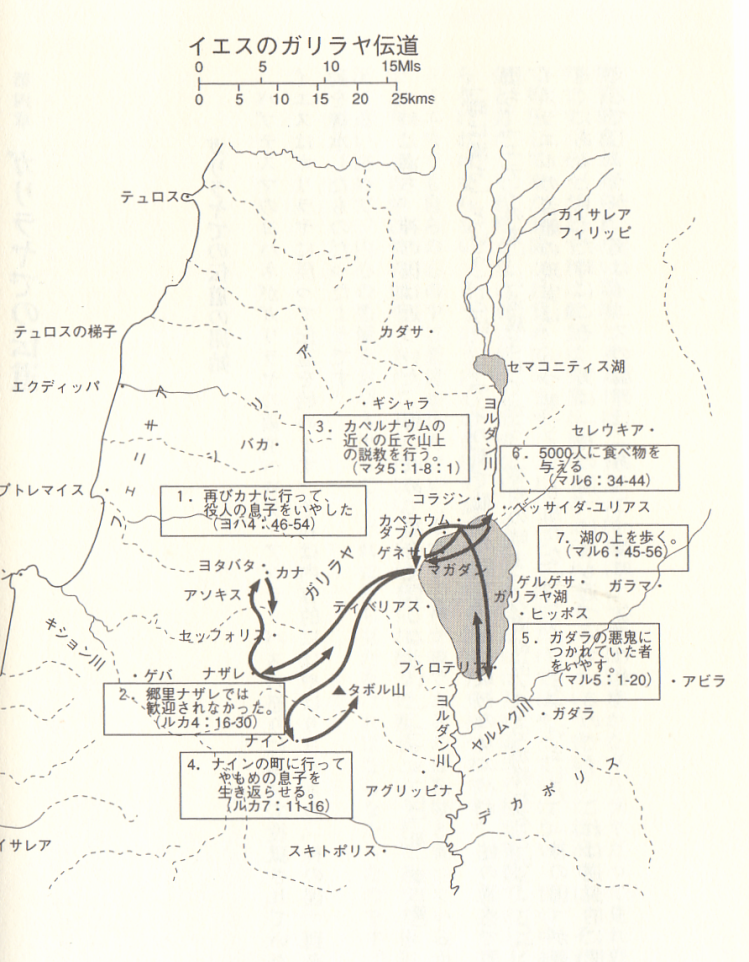
この言葉を信じた為に、自分が躓き、滅びるとしても少しも悔いはないと思える言葉をイエスは持っていた。そしてその言葉は、実際に全身全霊を投げ出して、その言葉のままに生きることを、要求して胸に突き刺さってくるような、ギリギリの言葉だった。その言葉をいったん聞いてしまった以上、その言葉の為に生き、死ぬのでなければ、全てが空しくてたまらなくなるような言葉だったのである。

イエスは死海のほとりの洞窟に彼らを連れていき、特訓をしたと想像できる。悪霊にとりつかれている人はどんな悲しみや苦しみを持って、どんな表情をしているか、悪霊は、メシアをいかに恐れ、どんな叫びを発するのか。とことん彼らは討論し、互いに相手の演技を批評させて直し合った。こうした相互の批評によってイエスは、弟子たちに自分自身で聖霊や悪霊イメージを作り上げ、それを表現することを学ばせた。それこそ弟子たちへの教義の血肉化であったのだ。

もしカファルナウムの会堂での最初の悪霊払いショーが失敗すれば、彼らは聖者を騙るイカサマ師として糾弾され、皆殺しにされたかもしれない。彼らは自分たちの一挙手一投足が命懸けだと分かっていた。だから初めのうちは恐ろしくなって足が竦み、声も出なかった。イエスは厳しくたしなめたに違いない。

**「世に救いをもたらすことなのに、何を恐れているんだ。わたしがわたしに聖霊を与えてくれた天のお父の救いを信じているように、あなたたちは、聖霊の救いを信じなさい。神が自らに似せて造った人間を愛してるなら、わたしたちの力になってくれない筈はないじゃないか。あなたたちは神に味方してもらっているのに、まるで神の前に引き出された罪人のように怯えているじゃないか。」**

こうして地獄の特訓によって鬼気迫る名演技の悪霊退治ショーが成功して、歴史はガリラヤのイエス中心に動きはじめたのである。もしイエスが、悪霊払いショーを思いつき、漁師を説得して、安易に自らの聖霊を信じて一芝居打たせたとしたら、それで彼らの命運はつきたのだ。



だから神を信じたり、聖霊を信じるのはいいとしても、神や聖霊の力に安易に依存することは許されない。いわゆるエセ・メシアが失敗したのは、自己神化が余りにも単純に行われ、奇跡が何の準備もなしに無媒介に起こるとか、何かのきっかけさえあれば起こると信じ込んだので、彼らのパフォーマンスは迫力に欠けていたからである。だからイエスが「メシア」として歴史を体現できたのは、どんな言葉を語り、どのように行動することがその条件であるのかを知っていて、その為に巧みに人々を組織し、動かすことができたからである。

**15聖霊による救い**

カファルナウムの大成功をきっかけに、魂の医者としての悪霊払いと、反トーラー主義の説教は、大きな相乗効果を呼び、民衆の支持は大きく盛り上がった。イエス自身や弟子たちは本当に聖霊による悪霊払いを信じ込んでいたし、演出的な工夫もあってイエスに聖霊が宿っているという信仰が拡大し、トーラーによる救いに代わって、この聖霊による救いがあるのではないかという期待が高まることになる。

「マルコによる福音書」でイエスがハンセン病の患者を癒した話があり、それを秘密にするように注意したが、広まってしまい大勢の人々が集まってくる話がある。

聖霊による救済の信仰移拡がるのはいいのだが、それは当然トーラーによる救済の原理とぶつかり、ファリサイ派との軋轢が大きくなり、イエスに身の危険が生じるおそれが出てくる。だからイエス自身も慎重にならざるを得なくなった。

イエスは聖者として振る舞うから、神に代わって罪を許すこともする。中風の人を癒した時に、イエスが「子よあなたの罪は赦される」と言ったのに対して、律法学者が心の中で神以外に罪を赦すことができるのだろうかと考えたのに対して、イエスはその心を読み取り、人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを主張している。

安息日に麦の穂を摘んだり、手の萎えた人を癒したりして、トーラーに囚われない活動をするようになる。これは頑迷なトーラー主義への批判でもあるが、自ら聖霊による救いを重視し、トーラーを改廃・修正する力を確信しはじめたことも意味している。

イエスはダビデ王が安息日に空腹の為に祭壇のパンを食べたという話をして、**「安息日は人のために定められた。人が安息日の為にあるのではない。だから人の子は安息日の主でもある」**と開き直っているので、安息日のトーラーに囚われないことを人間的な姿だと解釈する人もいる。

しかし、そのようにトーラーを独自に解釈して、安息日でも善を行ったり、命を救ったりするのを許されているとするのは、神の判決を勝手に変更することである。だからむしろ聖霊を宿していて、神に近いから安息日でも活動してもいいということなのである。これをみてファリサイ派とへロデ派の人々はイエスを殺す相談をするようになる。（「マルコによる福音書」第三章）画像は安息日に治療をするイエス

安息日のトーラーを蹂躙すると死刑というのは『民数記』 第十五章にある。イスラエルの人々が荒れ野にいたとき安息日に薪を拾い集めていた男が捕まり、主の判決が下った。**「その男は必ず死刑に処せられる。共同体全体が宿営の外で彼を石で打ち殺さなければならない。」（35節）**もちろんその後安息日違反に関する判決は、長い歴史のうちに緩和されるが、イエスのようにトーラーの権威に挑戦する形で安息日を蹂躙すれば、『民数記』の規定がそのまま適用される恐れもなしとはいえない。

しかしイエス暗殺の動機は、トーラーを蹂躙したことだけにあるのではない。トーラーによる救済を否定して、メシアの聖霊による救済を説くことで、ユダヤ教全体を総否定する傾向が見えたことにもあるのだ。

メシアの聖霊による救済は地上における神の代理人の登場を意味し、人の子の限界を越えて、神の子として振る舞うことである。それこそ人間イエスを神化するものであり、イエスに対するアイドル（偶像）崇拝である。超越神論の原則では神と人、神と自然は絶対的に断絶しているわけで、人の子が神の子として奇跡を起こし、審判を行っては断じてならないのである。

イエスの奇跡を聞いて、病気に悩む群衆は湖の岸辺に押し寄せた。悪霊が原因の病気の場合がほとんどだから、悪霊はイエスを見ると恐れ入ることになる。

**「汚れた霊どもは、イエスと見るとひれ伏して、『あなたは神の子だ』 と叫んだ。イエスは自分のことを言いふらさないようにと霊どもを厳しく戒められた」（第三章11節）**

もちろん、この悪霊は演技である。弟子たちが扮しているのだ。だからイエスが「神の子」と言わせたとも解釈できる。しかしアドリブということも大いにあり得る。

こんなにも群衆が押し寄せると、イエスも弟子たちも雰囲気に飲まれてしまったのではないか。つい弟子はイエスを「神の子」と呼んでしまう。イエスも聖霊を信じているだけに、悪霊払いは成功していると感じているから、自分のことを神の子ではないかと意識し始めているのだ。しかしそれは身の危険が伴うリスクが大きい。だから本気でいましめているのだ。

**16聖霊信仰の極致としての聖餐**

この聖霊信仰の極致が「人の子」についての聖餐思想である。これは「ヨハネによる福音書」で展開されている。福音書の中で「ヨハネによる福音書」が最も個性的で最も神秘的である。しかも一世紀末に書かれたらしいので、どれだけ歴史的事実の解読にとって資料価値があるのか疑問視するむきも多い。

「人の子」についての聖餐の記述が、初期キリスト教会で赤子の聖餐を秘儀で行っているのではないかとの疑惑を生んだということもあるが、ともかくこれは誤解の生じやすい問題である。それでパンとワインによる聖餐のオブラートにくるんで、「人の子」についての聖餐思想自体が隠されていた可能性が高い。つまりパンとワインを食べることが即ち人の子を食べることだという形で語られてきたのである。

「ヨハネによる福音書」の「人の子」すなわちイエスの肉を食べ、血を飲むことが永遠の命を得る条件だという発想は、聖霊信仰と密接に結びついている。イエスの肉体が聖なる肉体であり、それを食べると永遠の命を得ることができるのは、もちろんイエスの肉体が聖霊を宿しているからである。

勇士の肉体を食べれば、その勇猛さが獲得できるという人食いの論理があるが、同様に聖霊を宿した肉体を食べれば聖霊を宿すことができるのである。王やシャーマンなどの聖なる身体が食べられるのは、その聖霊を引き継ぐためである。ただし、イエスの聖餐は、ユダヤ社会ではカニバリズムが最も強くタブー視されていた中での突然の未開返り的発想であるだけに、イエス自身の発想かどうか、「ヨハネによる福音書」の作者の創作かどうかが検討されなければならない。

**第六章　イエスに対する聖餐**

**１「人の子の聖餐」をめぐる大離反**

イエス・フィーバーはいつまでも続かなかった。確かに悪霊追放による治療は、大きなブームを呼んだが、根治した人はそれほど多くはなかっただろう。一時的に良くなったと思えた病状も、しばらくするとまた悪くなる。芝居がかったパフォーマンスも、始めのうちは大いに民衆の興奮をかき立てたが、やがて眉唾ものだということになる。

そしてどうもイエスは、自分を神の子だと思い込まそうとしているらしい。それでファリサイ派などが危険思想としてイエスを排除しようとしているらしいから、係わり合いになるのはまずいというような風評が立ちはじめる。

それにイエスの説教は素晴らしく感動的だが、彼がユダヤの王に成って、ローマの支配から解放してくれるのでもなく、カエサルの支配に従えと言っているらしい。彼は貧乏人の味方だと言うが、インチキ臭い悪霊退治以外に一体何をしてくれるのだろう。こういう疑問が次第に生まれてくる。

そうした中で「ヨハネによる福音書」によると人の子の聖餐を巡って、弟子の大部分がやめてしまうという、教団にとっての一大事が起こった。「ヨハネによる福音書」を歴史的事件の解読の資料とするのは、一世紀未の成立という事情に鑑みてかなり躊躇するところだが、聖餐・復活の謎を解くためには、ひもとく必要がある。もしイエスに対する聖餐があったとすれば、その隠蔽のためにこの大分裂事件の記録は伏せておかざるをえなかったので、一世紀末までの文書では、この事件に触れることができなかったと考えられるからである。

**２イエスの言葉＝命のパン、信仰＝聖餐**

「ヨハネによる福音書」ではイエスは始めから神の子であり、神の子としての権威を示そうとしている。イエスが自身を命のパンとして規定するのも、イエス自身が永遠の命に与っていて、この永遠の命との一体化が永遠の命に至る道であることを主張するためであった。「ヨハネによる福音書」第六章33節から引用して考察していこう。

**「『 神のパンは天から降って来て、世に命を与えるものである。』そこで彼らが『主よ、そのパンをいつもわたしたちにください。』と言うと、イエスは言われた。 『わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渇くことがない。』」**

この箇所ではイエスのもとに来て、ともに活動すれば、イエスが生活を保障するから決して飢え渇くことがないという意味にとれる。また生活的な意味で飢え渇くことがないという意味ではなく、イエスと共に生きていれば精神的に充実して愛に生きることができるので、そういう意味で飢え渇くことがないという意味にも取れる。おそらく教団としての集団生活をしていたとすれば、その両方の意味が込められていただろう。

第六章46節から**「父（神）を見た者は一人もいない。神のもとから来た者だけが父を見たのである。はっきり言っておく、信じる者は永遠の命を得ている。わたしは命のパンである。あなたたちの先祖は荒れ野でマンナを食べたが、死んでしまった。しかしこれは天から降って来たバンであり、これを食べる者は死なない。わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは世を生かすためのわたしの肉のことである。」**

「信じる者は永遠の命を得ている」とあるのは、40節**「わたしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得るこ とであり、わたしがその人を終わりの日に復活させることだからである」**を受けている。そこでわたしを信じる者は永遠の命を得るので、「わたしは命のパンである」ということになる。ということは信じることで永遠の命を得られるのだから、ここで「食べる」とは「信じる」ことに他ならない。そこで「信じる」ことが「食べる」ことなら、イエスの「言葉」こそが「肉」だということになるのである。

**３人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ**

こうしてイエスがパンであり、イエスを食べるということは、イエスの言葉を信じることに他ならないことが分かる。しかしカファルナウムの会堂で教えを聞いていたユダヤ人たちはその意味が分からないので、**「どうしてこの人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか」**と激しい議論になったのである。そこでイエスはまた同じような説明を繰り返すのだ。

**53節「はっきり言っておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもいつもその人の内にいる。生きておられる父が、わたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生きるように、わたしを食べる者も、わたしによって生きる。これは天から降って来たパンである。先祖が食べたのに死んでしまったようなものとは違う。このパンを食べる者は永遠に生きる。」**

ここでイエスは分かりやすく、**「わたしの肉とは、わたしの教えた言葉であり、わたしを食べるということはわたしの教えを信じることである」**と解説すべきだった。カニバリズムのタブーが強いユダヤでは、こういう言葉は比喩としては激しすぎるのである。それに同じパレスチナの中の異教の神、モレク神へ我が子を生贄にする風習も知っており、野蛮な人食いについても民衆レべルで知識があったのかもしれない。ともかくそれは異教徒の間で行われているかもしれないがユダヤ教では絶対のタブーだったのだ。だから簡単には比喩だと取れなかったのだ。

沢山の信者がいればイエスの体は分けきれないから、皆に食べさせることができない、それではごく一部の者しか救われないじゃないかということになる。確かにイエスは、少なくとも民衆には比喩で語っていた。しかし比喩であるということが徹底しなかったのである。つまり比喩の部分ばかり多くて、それが何の比喩かの説明が少なかったのだ。

じゃあ弟子には比喩だということが理解できたのか、実はこれが大離反の原因になったのである。

**60節「ところで、弟子たちの多くの者はこれを聞いて言った。『実にひどい話だ、だれがこんな話を聞いていられようか。』 イエスは、弟子たちがこのことについてつぶやいているのに気づいて言われた。『あなたがたはこのことにつまずくのか。それでは、人の子がもといた所に上るのを見るならば … 。命を与えるのは〈霊〉である。肉は何の役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり‘命である。しかしあなたがたのうちには信じない者たちもいる。』」**

弟子たちは「実にひどい話だ。だれがこんな話を聞いていられようか」という反応をした。何故「実にひどい話」なのか、それは全身全霊をかけて人の子への信仰に生きなさいというのに、事もあろうに忌まわしいカニバリズムを比喩として使ったからだ。つまりたとえ比喩にしてもカニバリズムを肯定的な文脈で使っているのに頭にきたのである。

また比喩だということが理解できなかった弟子もいて、とんでもないことをイエスは言いだしたと受け止めたかもしれない。これに対するイエスの反応はというと、誤解を解こうという姿勢ではない。非常に謎めいた表現だ。**「それでは、人の子がもといた所に上るのを見るならば …」** となっている。この無言の部分は、**「その時、始めて信じるのか？」**ということになるのだろう。

人の子は天から降りて来たので、天に上げられる。この「人の子」であった証を見て、その時始めて信じることができるというのである。その信じるべき内容が**「命を与えるのは〈霊〉である。肉は何の役にも立たない、わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、命である」**ということであり、イエスの福音の言葉を信じて、その信仰に生きなさい、そうすれば永遠の命が与えられるという意味である。

**４大離反事件のミステリー**

この意味が納得できて残ったのはわずかだった。

**66節「このために、弟子たちの多くが離れ去り、もはやイエスと共に歩まなくなった。そこでイエスは十二人に、『あなたがたも離れて行きたいか 』と言われた。シモン・ペトロが答えた。『主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。あなたこそ神の聖者であると、わたしたちは信じ、また知っています。』」**

残ったのは十二人とも読み取れないことはないが、断定できない。ともかく大幅に減少したのである。その直接のきっかけは、「イエスの聖餐」についての解釈問題だが、イエス自身それほど誤解を解こうとしていないところをみると、既に大勢の弟子を抱える経済的基盤がなくなっていたと推察される。

大部分の弟子は、群衆が引いてしまったので、教団での仕事がなくなったのである。だから遅かれ早かれ去らなければならない運命だったのだ。

それにしてもこの「イエスの聖餐」に関する記述は不自然である。よく読めば、カニバリズムは比喩に過ぎないのに、比喩の部分が繰り返されて、何の比喩かが分かりにくい。「イエスの教えを信じることで永遠の命が与えられる」という趣旨よりも、「人の子の肉を食べ血を飲まなければ、永遠の命は得られない」という言葉だけが強い印象を残すようになっている。

それに「イエスの教えを信じることで永遠の命が与えられる」という趣旨をわざわざ誤解を招き、顰蹙を買い、大離反を招くような「人の子の肉を食べ血を飲まなければ、永遠の命は得られない」という比喩で語る必然性が感じられないのである。

またカファルナウムの会堂で一般人向けに比喩にしろカニバリズムを肯定的な文脈で堂々と弁じるのも疑問である。しかも比喩とはわかりにくい表現になっている。そんなことをすると世間からあらぬ疑いをかけられるし、それを理由に皆殺しにだってなりかねないのだ。

だからこの会堂での聖餐話はフィクションで、弟子にだけ語った、秘密の教義だったのかもしれない。それにキリスト教会の中心儀式であるのは、ここでは比喩に過ぎない筈の聖餐なのである。つまり「人の子の肉を食べ血を飲まなければ、永遠の命は得られない」というわけで、それをパンとワインを食べることで実践しているわけである。

**５「人の子の聖餐」の誓い**

では聖霊信仰の立場から考えて、イエスの聖餐は意義があるのか考えてみよう。たしかにイエスが存命中は、聖餐はイエスの教えを信仰することの比喩でよかったが、イエスがいよいよ処刑されるとなると、イエスの遺体をどう処理すペきかが重大な問題にならざるを得ない。聖霊を宿しているイエスの神聖な遺体なのだから、その聖霊を残された者達が引き継がなければならない聖霊信仰の立場から考えれば、それはどうしたら可能なのかという問題である。

『カニバリズムの秩序』 では未開における食人の理由の一つに、食べられる人の悪霊を除去するためというのがあげられている。肉をきれいに食べてしまって、骨だけにしてはじめて、肉が消化されることで、霊だけ分離され、離れることができるという。その場合、悪霊は体外に除去される。

ところが王やシャーマンに対する聖餐では、肉は消化されて体外に除去されるが、そのことで分離された聖霊は体内に止まって、食べた人に継承されるといわれる。イエスの場合の聖霊もつきものであるので、明らかに後者に該当する。

しかしイエスもカニバリズムや血の飲食を厳禁するへブライの文化圏において、いかに聖霊信仰をしていたとしても、人の子の聖餐を主張できただろうかという問題がある。

血の飲食を禁じているのは、血が命であるからだ。つまり他の命と混ざってしまうので、審判に際して蘇れなくなるのを危倶しているのである。しかしこれは他の動物や他人の血であるから命が混じっては困るのだが、混じる相手が神ならば、神に守られるということになるから、かえっていいのだ。

イエスの場合は、神の子だから命は絶たれるのではなく、逆に永遠となると見なされる。しかし、もしイエスが神の子ではなかったとしたら、イエスの血の飲食は、命が絶たれることを覚悟する必要がある。だからこそイエスは弟子たちに、将来イエスの死に際して「人の子の聖餐」を行うという誓いを立てさせたかったのである。何故なら弟子たちはその事で全身全霊をかけて、信仰に生きなければならなくなるからである。

私はカファルナウムの分裂劇は、弟子たちに「人の子の聖餐」を誓わせようとして、カニバリズムの狂気だとして大部分の弟子から拒否されたのが真相ではなかったかと思う。しかし「人の子の聖餐」を誓った弟子がすべてそれが文字通りに、イエスの遺体を食べて、イエスの血を飲むことであると分かっていたとは断定できない。イエスの教えがイエスの体であり、それを信仰することがイエスを食べることだと比喩的に受け止めて、誓いにサインした可能性もある。それが「ヨハネによる福音書」記事にもイエスによる象徴的な説明の中に反映しているのである。

**６「最後の晩餐」は予行演習**

イエスの布教活動は三年間程ではなかったかといわれているから、「最後の晩餐」は意外に早く訪れる。「マタイによる福音書」第二六章26節より

**「一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えながら言われた。『取って食べなさい。これはわたしの体である』（わたしの記念としてこのように行いなさい。ー「ルカによる福音書」）また杯を取り、感謝の析りを唱え、彼らに渡して言われた。 『皆、この杯から飲みなさい。これは罪が許されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。』」**

イエスが生きているのにイエスの肉を食べ、血を飲むことはできない。だから、たとえイエスが人の子の聖餐を語っても、それは比喩的に受け止められて当然である。「ヨハネによる福音書」のカファリナウムの場合は、イエスの教えがイエスの命の肉であり、それを信仰することがイエスの肉を食べることであった。しかし今宵は「最後の晩餐」である。イエスは捕らえられ、十字架に掛けられて死ななければならないのだ。「山上の垂訓」の頃の群衆が押し寄せてきていた当時の勢いがあれば、少々の弾圧ははねかえせるが、今や教団の力は衰微してしまって、民衆を味方にすることはできなくなっている。

イエス自身は主観的にはなんらやましいところはないし、罪人として裁かれるいわれは全くない。しかしファリサイ派・へロデ派の基準からみれば、イエスはとんでもない悪党なのである。何十遍死刑にしても足らないくらいである。トーラーによる救済というユダヤ教の原理を否定し、メシアによる救済という原理を打ち出して民衆を惑わし、安息日を侵すなどトーラーを蔑ろにしてきた。人であるのに悪霊を追い出したり、人の罪を赦したりして、神の領域に踏み込もうとしたエセ・メシアである。

人間が神の如く振る舞うのは人を神とする一種のアイドル（偶像）崇拝であり、最も許されざる神への冒瀆である。しかも彼は人の子への聖餐を弟子に誓わせたという、人肉を食べ、血を飲むというのは最も許されざるおぞましい行為ではないのか、それを行う約束を弟子に強要していたらしいのだ。  
  
　イエスは自らの体内に宿っている聖霊を信じていた。たとえ肉は滅んでも、聖霊は不滅だ。この聖霊は弟子の体に乗り移り、弟子の中でイエスは聖霊として復活しなければならない。

**「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもいつもその人の内にいる。生きておられる父が、わたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生きるように、わたしを食べる者も、わたしによって生きる」**と語っていたわけだから、イエスはこの方法として聖餐を考えていたのだ。比喩でもなんでもない、本当の聖餐である。

もし処刑され、墓に埋められてしまったら、聖霊だって棺の中に閉じ込められてしまう。幸い、「最後の晩餐」に集った弟子たちは、イエスへの聖餐を誓って教団に残ったいわば聖餐派の弟子ばかりである。しかし比喩的にだけ捉えて聖餐を誓った者もいるかもしれない。イエスの教えを信じて、その教えに忠実に生きることを聖餐と受け取られてしまうと、聖餐が空振りになってしまう恐れがある。

そこでイエスは「最後の晩餐」を予行演習と位置づけて聖餐の練習をしたのではないかと思われる。イエスはパンとワインを取り出して、パンをイエスの肉と仮定させ、ワインをイエスの血と仮定させた。パンを千切っては、さあこれがわたしの肉だ、これを食べなさい。そうすればわたしの肉とあなたの肉は一つになり、わたしは永遠にあなたの命になって生きるんだ。そしてあなたは復活のキリストとなる。

次に赤いワインをついで、弟子たちにすすめた。さあこれがわたしの血だ、わたしの血は、神によって世に救いをもたらすために遣わされたわたしを、受け入れなかった人々の罪を、わたしの犠牲で贖うために流されるんだ。さあ永遠の命に与るためにわたしの契約の血を飲みなさい。

これだけ念入りに指示しておけば、十二使徒は聖餐を実行してくれると思ったか、それとも具体的に、遺体の搬送から、採血の要領、肉の捌き方、生肉で食べるか、焼いて食べるか、内臓や骨の処理はどうするかなど細かい打ち合わせがあったかもしれない。しかしイエスの肉を食べ、血を飲む聖餐は秘儀であり、露見したら、食人、飲血の罪で皆殺しにされるのを恐れて、これ以上のことは『バイブル』では伏してあるとも考えられる。

しかし文学的に想像するなら、イエスは象徴的にカニバリズムの儀式を行っただけで、それ以上の指示や打ち合わせはなかったと考えた方が、イエスと弟子たちとの心理的葛藤を凝視するのに好都合だ。この象徴的パフォーマンスで、弟子たちの中には、聖餐は象徴的な儀式として、イエスを記念してパンとワインですればよい、との意味と受け取った者もいたかもしれない。

もちろん聖餐を行えという指示だと受け止めた者もいるだろう。そうするとその準備が大変だ。周到な計画にもとづき、大トリックで気づかれないように遺体を搬送し、秘密の洩れない聖餐の式場を確保して、厳かに、清潔にしかも神々しく、スムーズに執り行われるように準備しなければならない。イエス教団は悪霊退治ショーの演出など見事な連係プレーを行っていて、組織性に優れ行動力もあったのでシモン・ペトロを中心に段取りをつけたと思われる。

もちろん最後の晩餐では、その夜にも捕まるというのはイエスの予感に過ぎなかったから、だれもイエスの聖餐の準備にとりかかったわけではない。彼らは危機を感じながらも、自分たちの内でだれが一番偉いかを論じたりしている。ペトロはイエスと一緒に牢に入って、一緒に処刑されてもよいと言うが、イエスにお前は夜が明けるまでにわたしの事など知らないと三回言うだろうと予告される。

それからイエスの一行は**オリーブ山に行き、ゲッセマネ（油絞り）という所でイエスは悶え悲しみ、神に祈った。**その時、お供の弟子たちは居眠りをしてしまっていた。弟子たちは悲しみの果てに眠り込んでいたとあるが、イエスにすれば、やはり弟子にとったらイエスの死は他人事にすぎないのか、という気持ちだったようだ。

**７ピエロ的な王イエスの生贄**

そして恐れていた事態になった。裏切り者のイスカリオテのユダが接吻をしようとイエスに近づいてきたのだ。接吻の相手がイエスだというサインになっていたのである。**「ユダ、おまえは接吻で人の子を裏切るのか」**とイエスは言った。ユグが何故イエスを裏切ったのか、「ルカによる福音書」では**「サタンが入った」**と理由づけをしている。

というより、ユダはイエスをフェティシュ（物神）として信仰していたが、何らかの幻滅体験があって、イエスを攻撃・破壊しようとするようになったのである。ユダは裏切りによってイエスを脱神聖化すればよかったのだが、イエスが処刑されると知って罪の意識から自殺している。つまり人間イエスが生きることまではユダは否定していなかったのである。

さてイエスが捕らえられて処刑される事態になった。その間の経緯は本書の考察対象ではない。最近のイエス解釈で文化人類学の「トリック・スター」の理論を取り入れて、イエスがほんの数日間、祭儀的に王位についた後で処刑されたという解釈がある。

イスラエルへの凱旋や神殿荒らし、処刑の際にユダヤの王と記されたとの記述から推論されているわけだ。それは王権をリフレッシュさせるために、祝祭的に王位につけ、二、三日暴れさせておいて、祝祭が終わると道化を王の身代わりに処刑するという風習であるからである。

こうして王への民衆の反感を道化（トリック・スター）に転嫁させたというのだ。その場合、道化王は神に捧げられて永遠の生をうけるとされているから、イエスの復活予告とも合致する。しかしユダの裏切りや裁判などはすべて創作ということになるので、身代わりの道化王の祭儀という文化人類学的類型の強引な適用という印象は拭えない。

**８議員ヨセフ、イエスの遺体を引き取る**

聖餐が実際に行われたかどうかの考察が本書の直接のテーマである。聖餐の為にはまず死後なるべく早く遺体を手に入れる必要がある。ところがイエスとその弟子たちは犯罪者扱いで、エルサレムにいるだけでも逮捕されかねないから、有力者にイエスの遺体引き取り役をしてもらう必要がある。そこで白羽の矢がたったのは、アリマアタ出身の富裕な議員ヨセフだった。  
画像は2010/03/05「偉大な生涯の物語」「パッション」に見る人間の愚かしさと残酷さ記事カテゴリー喫茶室http://www.mactechlab.jp/caferoom/11323.html

「マタイによる福音書」では、議員ヨセフは、非公然だがやはりイエスの弟子だったのだ。ピラト総督はイエスを処刑したくなかった方だから、ヨセフによる遺体引き取りを許可した。議員ヨセフはイエスの遺体を墓に埋葬したとされている。

翌日、ファリサイ派は墓に番兵をつけて三日目まで見張ることをピラトに許可を受けた。それはイエスが三日目に復活すると公言していたからである。しかしこの番兵案は無駄だった。私の推理によると、イエスの遺体は埋葬された直後に、あるいは埋葬されたとみせかけて、なんらかのトリックで密かに搬送されていたのである。

ファリサイ派は弟子たちがきて死体を盗み出し、イエスは復活したと宣伝するだろうと予測していた。ファリサイ派は死者の中から墓を暴いて復活するという復活イメージで捉えていたのだ。しかし三日後に墓を暴いたのでは、もう遺体の新鮮さが損なわれるから聖餐はできない。死者の中からではなく、生きている者の中に復活させるために、最初の日に遺体を運んだのだ。

最初の日に番兵がついていたとの記述は福音書にはない、たとえいたとしてもその目を得意のトリックで誤魔化して、墓から搬送したことは十分考えられる。

**９骨まで食べたか？**

はたして何処で聖餐したかはもちろんミステリーである。条件が許せば、「最後の晩餐」と同じ場所が最も相応しい。あくまでも本書は聖餐があったとすれば、復活信仰の成立の謎が解けるという仮説の呈示であり、仮説の実証は目的ではない。別に墓地のごく近くに相応しい場所があればそれでもいいのだ。

聖餐の仕方が次に問題になる。ウォーカーの『神話・伝承事典』を大和はよく参照している。この事典は驚くべき内容の記述が多いが、どのような形で原資料から参照されているのか、その原資料の資料価値はどの程度なのかがはっきりしない。

こう断った上で「贖罪」から引用しておく。**「キリスト教のシンボリズムでは、イエスは神の仔羊となり、過越の祭りの仔羊と同様、罪をあがなうために殺された」**とある。とすれば焼き尽くす捧げ物の形である。神に捧げる場合は人間は食べないけれど、イエスは弟子たちに食べられなければならないから、黒焦げになる前に食べられたのかもしれない。ただ室内でそれができたかが問題だが、血抜きをした後、血を回し飲みし、それから肉を捌いて少しずつ焼いて食べたと考えられる。

では骨はどうしただろう。骨は再生のために必要だという考えがあり、そのままにしておかれたという推理も成り立つ。 『神話・伝承事典』 の「骨」を見てみよう。

**「過越の祭りの仔羊について、神は『その骨を折ってはならない』と命令した。（『出エジプト記』 第十二章46節） 『これを少しでも朝まで残しておいてはならない。またその骨は一本も折ってはならない』（『民数記』 第九章12節）『主は彼の骨をことごとく守られる。その一つだに折られることはない』（『詩篇』第三四章20節）こうした預言がことごとく成就するために、イエスの骨は折られることなくそのままにしておかれ、イエスは神の仔羊になったのである。『これらのことが起こったのは、「その骨は砕かれないだろう」との聖書の言葉が、成就するためである』（『ヨハネによる福音書』 第十九章36節）」**

だが私はこのウォーカーの説明には疑問が残る。骨が折られてはならないのは、地中の墓から復活する為である。基になる骨があれば、再生しやすいところからイメージされている。ところがイエスの再生は弟子の体の中で行われるのだから、骨も粉未にして食べた方がよいのかもしれない。とはいえ骨は無機質であって骨には霊が宿っていないと考えていたとすれば、骨だけ残して食べたことも考えられる。しかし骨だけ残して露見したら困るので、やはり食べてしまったかもしれないし、密かに埋葬したかもしれない。

**10屠り場に引かれる仔羊**

では参加者はだれか、つまりだれが食べたのかということである。人数はあまり大勢でも困る。しかし十二使徒の内、既に首を括って死んだ裏切り者イスカリオテのユダ以外の十一人は全員いた筈だ、彼らは全てその後命がけの布教をし、ほとんどは殉教している。

シモン・ペトロ、その兄弟アンデレ、ゼべダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネ、フィリポとバルトロマイ、トマスと徴税人のマタイ、アルファイの子ヤコブとタダイ、熱心党のシモンで十一人である。その他には遺体引き取りの功労者議員ヨセフ、墓までついていったマグダラのマリアともう一人のマリアである。

彼女たちは三日目に墓が暴かれ、復活のイエスと出会うパフォーマンスにもかんでいるので、聖餐にも参加しただろう。計十四人で一杯だ。あと事情を知った何人かは強引に参加させてもらったかもしれない。

聖餐を見事に仕切ったのはシモン・ペトロである。彼はこの功績で教会の初代の長になる。シモン・ペトロは最初の弟子であり、それ以来イエスと表裏一体の関係でやってきた。カファルナウムの会堂での最初の悪霊役者は、おそらくシモン・ペトロだったのではないか。そして実質的には、シモン・ペトロが教団の運営やイベントを準備し、成功させてきたのではなかろうか。



**ヴァティカンのシモン・ペトロ像**

彼は恐らく清潔で荘厳な聖餐式を演出しただろう。ただ単にイエスの血を飲み、肉を食べればいいというのでは、とても納得できない。彼らは人食いを日常にしていないのだから、雰囲気が悪ければ、喉を通らないのだ。食べるときの動作や表情まで前もって打ち合わせたに違いない。貪り喰うようではもちろんいけないし、泣きわめいてもらっても困る。悲し過ぎる表情もいけない、主イエスとの一体化は大きな喜びである筈だから。

遺体の到着を待つ間に部屋はおそらく白い布が壁やテーブルに張りめぐらされ、花がたくさん飾られた。それは聖餐の飾りであり、臭い消しのためでもある。そして火が熾され人々の衣裳も白一色である。なぜなら血が飛び散ったり、肉がついたりして汚したりしてはいけないので、参加者が厳かで緊張した気持ちになるからである。

いよいよ遺体が到着すると、全身を拭い清め、硬直をほぐして白い布で包み、血が飛び散らないようにして、血抜きをする。

そういう動作を固唾を呑んで皆が凝視するかっこうになってはいけないから、式次第の順に『バイブル』 からの聖句や、イエスの言葉がみんなで唱えられ、賛美歌が歌われる。例えば「イザヤ書」第五三章から次の詩が読まれたのではないか。

**「乾いた地に埋もれた根から生えでた若枝のように、この人は主の前に立った。  
見るべき面影はなく、輝かしい風格も、好ましい容姿もない。彼は軽蔑され、人々に見捨てられ、多くの痛みを負い、病を知っている。  
彼は私たちに顔を隠し、私たちは彼を軽蔑し、無視していた。**

**彼が担ったのは私たちの病、彼が負ったのは私たちの痛みであったのに、**

**私たちは思っていた‘神の手にかかり、打たれたから、彼は苦しんでいるのだと。  
彼が刺し貫かれたのは、私たちの背きのためであり、彼が打ち砕かれたのは‘私たちの咎のためであった。  
彼が受けた懲らしめによって、私たちに平和が与えられ、彼が受けた傷によって、私たちは癒された。  
私たちは羊の群れ、道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。  
その私たちの罪をすべて、主は彼に負わせられた。  
苦役を課せられてかがみ込み、彼は口を開かなかった。  
屠り場に引かれる小羊のように、毛を切る者の前に物を言わない羊のように、彼は口を開かなかった。  
捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。  
彼の時代の誰が思いを巡らしたであろうか。  
私の民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり、命ある者の地から断たれたことを。  
彼は不法を働かず、その口に偽りもなかったのに。  
その墓は神に逆らう者と共にされ、富める者とともに葬られた。  
病に苦しむこの人を打ち砕こうと主は望まれ、彼は自らを償いの献げ物とした。」**

**11演出された至福の聖餐式**

血抜きが終わると、早速杯を回すが、その前に元気をだすためにかつてイスラエルに乗り込んだ時のみんなで叫んだ言葉に節をつけて歌った。

**「ホサナ。主の名によって来られる方に祝福があるように。我らの父ダビデの来るべき国に祝福があるように。いと高きところにホサナ。」（「マルコによる福音書」第十一章）**

血の杯を飲みほせるように、一人ずつにイエスの「最後の晩餐」の言葉**「皆、この杯から飲みなさい。これは罪が赦されるように、多くの人のために流される私の血、契約の血である」**を皆で読んで励ましたのである。

血が固まり過ぎていたらワインで割ったかもしれない。さて恐らく体の上の部分から、切り出されていった。もちろん白い布によって直接見えないようにし、血が飛び散ったり、したたって床が汚れたりしないように細心の注意が払われた。

食べやすい味付けの工夫が必要だ。柔らかくて新鮮な部分は火を通さなかったかもしれない。もちろん一人一人にあの「ヨハネによる福音書」第六章のあの言葉を繰り返したのである。

**53節「人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもいつもその人の内にいる。生きておられる父が、わたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生きるように、わたしを食べる者も、わたしによって生きる。これは天から降って来たパンである。先祖が食べたのに死んでしまったようなものとは違う。このパンを食べる者は永遠に生きる。」**

こうした演出の効果は素晴らしいものがあった。彼らは天使たちの賛美の歌に包まれているような高揚を味わって、イエスと血と肉で一体化する喜びを堪能できたのである。もし演出がまずく、無秩序になんとか喰わなければならないという悲壮な心境だと、発狂しそうになっただろう。

だって、イエスの死体が解体され、バラバラ状態になっていき、血があちこちにべとべと付き、肉が体やテーブルや床や壁にこびりついたりするのだ。そして嫌がる弟子たちにペトロたちが「喰え、喰うんだ！」とわめきちらしたりする、そうなるととんでもない宗教に入ったものだということになり、長続きはしなくなる。

聖餐に加わった人達がその後に辿った壮烈な求道の人生をたどれば、聖餐式が成功であったことは間違いないだろう。イエスの血も肉も実際は不味いものだ。死後硬直がはじまっていただろうからなおさらである。でも信仰から神の子を食べるのだから、そしてその聖霊を取り込み一体化するのだから、その喜びは無限に大きい。それは絶対者との合一という至福体験なのである。また至福体験にしようと皆で努力し、創意工夫を凝らしてそれに成功したのである。もし儀礼としての形式が整っていなかったら、人生で最もおぞましい体験になっていたのである。

**12福音書におけるイエスの復活**

イエスの肉と血を食べ、その聖霊を体内に取り込むことで、不滅の聖霊は弟子の肉と血に宿ることになり、そこに生きつづけることになるが、はたしてそれで弟子たちがイエスの復活を体験したことになるだろうか？

イエスの精神が乗り移るのだから、イエスは弟子たちとして、その内面に復活したとは言えるだろう。しかしまだイエスが一個の生きた人間として蘇っていることにはならない。

福音書におけるイエスの復活は、はっきりと生きているイエスの肉体的な復活なのである。もちろん福音書はキリスト教会が教団の教義に沿って内容をある程度修正しているのだから、わざと復活を内面的精神的事件に止めないで、イエスの肉体が死者の中から蘇った奇跡として描いたとも受け止められる。

ただしここでどうしても疑問が残るのは、内面的精神的な復活だけでは、インパクトが弱いのではないかということである。つまりそれだけで使徒たちのように、それを歴史的にみて最大の奇跡として受け止め、その出来事を知らせることに残りの全生涯を捧げ尽くすことができただろうかということだ。

すべての忘れがたい人々との出会いは、私たちの心に消しがたい痕跡を残しており、その思い出は事にふれ復活してくるが、そういった復活とイエスの聖餐を介しての一体化による内面的復活とは完全には区別しがたいのではなかろうか。  
  
　やはり目の前に生身の体で復活してくれた方が何万倍もびっくりする。だって聖餐を体験した以上、イエスが自分の中で生きている、復活していると感じるのは当然だが、消滅した肉体が元通りになって目の前に現れることなどあり得ない思われるからである。

では福音書の復活の記述を読んでおこう。「マタイによる福音書」第二八章１節

**「さて安息日が終わって、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリアともう一人のマリアが、墓を見にいった。すると大きな地震が起こった。主の天使が天から降って近寄り、石をわきに転がし、その上に座ったのである。その姿は稲妻のように輝き、衣は雪のように白かった。番兵たちは恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった。」**

「マタイによる福音書」 では天使が天から降りてきて、墓石をのけるところまで婦人たちは目撃しているが、「ルカによる福音書」や「マルコによる福音書」では、番兵は登場しないし、「石は既にわきへ転がしてあった」のだ。ただ言えることは墓石を転がしたのはファリサイ派ではなくイエス側の者だということである。これは三日目の朝に、墓石を暴いて、三日目に墓から蘇ったことにする筋書きに沿っているのだ。

これは私の推理では、最初の日に墓に入れたと見せかけて墓から遺体を搬出したことをカモフラージュするためにイエスの弟子たちが、番兵たちが未明うとうとしている隙に、数人で墓石を開け、墓に入ってイエスの身代わりの人形を片づけてしまったのである。

番兵たちは驚いて墓に入ったがそこには既に遺体は無かったのだ。数人の番兵がこのことを祭司長に報告したとあるが、番兵の数はこれで全員だったのではないか。

「マタイによる福音書」によると、議員ヨセフはイエスの遺体を受け取ると、まず**「きれいな亜麻布に包み、岩に掘った自分の新しい墓の中に納め、墓の入口には大きな石を転がしておいて立ち去った」**とある。わたしはこの亜麻布に包んだ時か、搬送の途中で遺体をすり替えたと思う。

恐らく人形を布にくるんで墓に納めたのだ。この間、好都合にも番兵が監視していたという記述はない。わたしはイエス集団なら何千人の監視下でも、遺体のすり替えぐらいはやれたと思う。ガーリャ・コーンフェルトの『歴史の中のイエス』では、土曜日の朝に番人の監視がついたとき墓を覗いた筈だとしているが、亜麻布に包まれていたのですり替えに気づかなかったのではないだろうか。

**画像は、ピエロ・デッラ・フランチェスカの「キリストの復活」一四五七年頃 サンセポルクロ市立美術館**

「マタイによる福音書」の続きを読もう。

**「天使は婦人たちに言った。『恐れることはない、十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、あの方はここにはおられない。かねていわれていた通り、復活なさったのだ。さあ遺体のおいてあった場所を見なさい。それから急いで行って弟子たちに こう告げなさい。「あの方は死者の中から復活された。そして、あなた方より先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる。」確かにあなた方に伝えました。』**

**婦人たちは恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走っていった。すると、イエスが行く手に立っていて、「おはよう」と言われたので、婦人たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した。**

**イエスは言われた。『恐れることはない。行って、わたしの兄弟たちにガリラヤに行くように言いなさい。そこでわたしに会うことになる。』」**

『マルコによる福音書』によると「白い長い衣を着た若者」となっており天使と断定していない。ガリラヤに行くという連絡は同じである。「マタイによる福音書」によると婦人たちが、この復活の知らせをするために走っていると行く手にイエスが現れている。しかし「ルカによる福音書」では知らせに行く途中の出会いはない。ちなみに「マルコによる福音書」 第六章９節では**「イエスは週の初めの日の朝早く、復活して、まずマグダラのマリアに御自身を現された」**とあり、マグダラのマリアにだけ現れている。その点は「ヨハネによる福音書」も同じである。

**13マグダラのマリアの復活幻想**

福音書にはイエスの恋愛とか性生活については全く記述がないから、マグダラのマリアとの関係は断定的なことは言えないが、すくなくともマリアにとっては、七つの悪霊を追い出してもらった救い主であり、自分を始めて人間として人格的に認め、愛してくれた人であり、生きる支えであり、最も慕わしい人であったことは確かである。

そのイエスを亡くしたが、聖餐に加わって今や永遠にイエスと共に生きている心境になっていた。そしてイエスがいつも側にいて自分に話しかけてくれるような気持ちでいたのだ。言い換えれば、少しでもイエスに似ていれば、イエスが復活したと思い込みやすい精神状態になっていたのである。

もちろん聖餐に加わっていなければ、そこまで異常な心理にはならなかったのだが、聖餐は神との合一なので、全能幻想が著しく強くなってしまう。自分のイエス復活の期待が偶然道で遇った人にまで振り向けられ、復活のイエスと思い込んで、抱きついてしまうのだ。

相手の男性も愛しい人に先立たれて気が触れていると同情して、よしよしと穏やかに対応したのだろう。「ヨハネによる福音書」は、墓の中でマグダラのマリアに復活したイエスが話しかけている。

**「イエスは言われた。『婦人よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか。』マリアは園丁だと思って言った。『あなた方があの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。わたしが、あの方を引き取ります。』イエスが『マリア』と言われると、彼女は振り向いて、へブライ語で 『ラボニ』と言った。『先生』という意味である。イエスは言われた。『わたしにすがりつくのはよしなさい。まだ父のもとに上っていないのだから。わたしの兄弟たちのところへ行って、こう言いなさい。「わたしの父であり、あなたがたの父である方、また、わたしの神であり、あなたがたの神である方のところへわたしは上る。」と。』」**

マリアは園丁だと思っていた。そして普通に話していたわけだ。ところが「マリア」と呼ぶイエスの声がすると、その園丁をイエスと思い込んで、すがりついたのだ。この「マリア」という声は幻聴である。彼女はきっとイエスが逮捕されてから、ずっと「マリア」と呼ぶイエスの声が幾度も幾度も聞こえていたはずである。その声をきっかけに園丁がイエスに見えてしまったのである。

それからの園丁の言ったことは、まともには聞いていない。マリアがイエスならこういうと想像している言葉に変形されて聞こえているのだ。「マルコによる福音書」ではマグダラのマリアは、イエスを見たと皆に報告するがだれにも信じてもらえなかった。おそらくマグダラのマリアが悪霊につかれやすい、つまり激しくて、思い詰めるタイプなので幻想を見たのだろうと思ったのである。

ガリラヤに行くという連絡は既に、イエスが生前に、最後の晩餐の後、オリーブ山でしていたから、マリア達の報告を聞いても、それがイエスに会ったことの証にはならなかったのだ。

十一人の使徒たちは、聖餐を体験しているので、自分たちの体内に入ったイエスがガリラヤに現れるというのは簡単には納得できなかった。理屈から考えても、体内に入ったのだから、マリアのようにイエスに恋愛感情を抱いていれば、幻想的な復活体験もあるだろうが、弟子たちの心の中に内面的に精神的に復活する筈だと思っていたのだ。

それから留意すべきなのは、十一人の使徒や婦人たちは三日目にまだエルサレムにいたということである。イエスが捕まって、身の危険を感じただろうが、ガリラヤに逃げるようなことはしていなかったのだ。それは何故か、エルサレムでしなければならないことがあったからである。それは私の推理では、イエスの聖餐であり、三日目の朝に墓を暴くことであった。

**14エマオでの復活体験**

マリアの場合最初は園丁の姿だったが、「ルカによる福音書」では二人の弟子がエマオという村に向かって歩いている途中で、見知らぬ旅人の姿でイエスが現れ、すっかりイエスのことを話し込んだ。一緒に泊まることになり、イエスは賛美の祈りを唱え、パンを裂いて弟子に渡したら、やっと弟子の目が開けてイエスだと分かったという記述がある。

そしてそのとたんイエスの姿は見えなくなったというのだ。この話などはどこか幽霊譚みたいで、借り物の感じがする。ただしパンを裂くという聖餐の記憶を呼び覚まされることによって、見知らぬ旅人がイエスに見えたというところだけ取り出せば、私の推理も的はずれではないことになる。

というのは、聖餐によってイエスと合一しているのだから、いつでもイエスは自分の側にいる筈だと潜在意識では思っているから、素晴らしい霊的な話をする人がいるとイエス自身に見えてくるのはむしろ当然の事なのである。

確かにイエスの肉や血に何らかのドラッグがあるわけではないが、聖餐の体験はあらゆる体験を超絶した強烈なものであったから、パンを裂くというシンボリックな行為で一気に生々しく聖餐体験が想起され、それに圧倒されて知覚像に大いなる影響を引き起こしたのには何の不思議もないのだ。

**画像はエオマでのイエスの復活**

実験心理学で臨床的にエマオでの復活体験が再現できるかと言われれば、それは難しい。肉や血を食べることと、食べられた対象の復活幻想には必然的なつながりはない。あくまでも歴史的に一回限りの聖餐に伴って、その一度限りの精神的衝撃によって生じた、それこそイエスの聖餐に固有の心理現象だったのだから。

しかしその時の弟子の名はクレオパであるから、十一人の使徒に入っていない。そしたら一般信者まで聖餐に加わっていたことになってしまう。私の仮説は別にその可能性を百パーセント否定しているわけではない。ただクレオパはイエスの親族だったという事情もある。

ともかく沢山の復活体験話が造られた筈であり、その大部分は聖餐の事実がそこから露見しないように細心の注意を払って造られたと思われる。だから復活譚の多くが、作為的であり、聖餐による復活を匂わせるものでない方がむしろ当然なのである。

**15十一人の使徒との再会**

さていよいよ十一人の使徒との再会である。場所は何処か、「マタイによる福音書」では約束のガリラヤでの再会である。ところが「マルコによる福音書」や「ルカによる福音書」では、エルサレムで十一人が一緒に食事をしているときに現れている。

わたしは「マタイによる福音書」の記述は作為的だと思う。イエスが実際に死者の中から生身の体で復活したのなら、予告通り「ガリラヤでの山の中の再会」を演出するだろう。しかし私の仮説は、あくまで聖餐による復活だから、復活のイエスが弟子たちと別にいて、弟子たちをガリラヤに招集したのではないと思う。

それに三日目の復活予告があったのだから、三日目に使徒たちに現れてしまう筈である。イエスの復活に最も相応しい場所は、皆で一緒に肉とワインで食事をしているところである。あるいはパンを裂いている場面である。

まだ三日前の聖餐の感動が生々しいから、食事の場面にイエスは最も現れやすいわけである。ではどういう形で現れるのか？聖餐の感動が食事によってゆり戻されてくる。そして再び神との合一が実感されるのである。その時、自分自身とイエスが区別できなくなるのだ。そして自分の体内でイエスの聖霊が生きていて、勝手に語りだすのである。

それはその人自身は全く無言のままであって、自分の内面でのイエスの言葉である。だから他人からみれば呆然としているように見えたかもしれない。あるいは人によってはイエスがその人の口を通して語り始めるのだ。特にそれが年格好がイエスと同じ位とすれば、本当にイエスが甦って話しているようにみえただろう。特に聖餐体験者からは、紛れもないイエス本人の復活に思えたのである。

マグダラのマリアが園丁をイエスと思い込んだり、クレオパが見知らぬ旅人がパンを裂く動作で急にイエスに見えたりしたのと同じ論理である。

やすいは見てきた事のように言うが、聖餐により食べた者と食べられた者の同一視の倒錯が生生しく生じるという、臨床データに基づいて語っているのかが問われるところだ。

今日では未開部族による儀礼的な人食いも、サバイバルの為の人食いも無くなっている。それにイエスの聖餐の場合は、人食いが絶対的なタブーの文化の中で、イエスとの合一による聖霊の再生と、それに続くであろう終末・審判・神の支配の到来をたぐりよせる為に、たとえゲへナの血の河で永劫の苦しみに遇おうとも後悔しないと覚悟を決めて、行った聖餐だったのだ。

そういう歴史的事件の心理的影響を臨床データの結果から推量できるわけはないのだ。だからわたしも仮説としてあくまで可能性の問題として語っているわけである。

証拠といえば、弟子たちに復活信仰が生じた事が挙げられる。もちろんキリスト教徒にとっては、超越神の起こされた奇跡だから証拠にならないが、もし超越神が起こされた奇跡でないとしたら、復活信仰はインチキではなかったのだから、聖餐の結果としか考えられない。では確証もないくせに、そういう仮説を立てるのは無責任であり、キリスト教の名誉を著しく棄損する破廉恥な行為ではないかと憤る信徒もいるかもしれない。

ここで憤ってはいけない、敬虔な信徒たちよ！イエスの肉と血に対する使徒たちの聖餐行為の仮説が破廉恥というなら、あなたたちは、イエスの血と肉に対する使徒たちの聖餐行為自体を冒瀆することにならないか。

聖餐が事実だとしたらそれは神聖で、事実でなかったとしたらそれはイエスの遺体を凌辱する猟奇的、犯罪的、変質的行為であるということになるのか？考えてもみたまえ、あなたたちは二千年間もイエスの肉を食べ、血を飲んできたと自称してきたではないか。それをパンとワインという形で行えば神聖な聖餐だが、生身の肉と血に対して行えば神聖じゃなくなるとどうして言えよう。

イエスの身体が聖霊を宿していた聖なる肉であったとしたら、そしてその血が永遠の命の血であったとしたら、それらをバクテリアの聖餐に任せる方がはるかにはるかに冒瀆ではないのか。

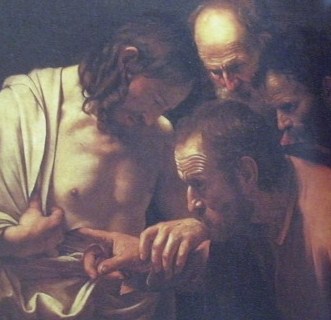
イエスに自分たちの運命のすべてを捧げ尽くしていた使徒たちは、フロイト的に潜在意識を探れば別だが、自覚的には、決して猟奇的、変質的に聖餐をしたわけではない。わが身はたとえこれで滅びようとも、世界を救済する為に行ったのである。

その行為はこれまでの人類の歴史に終末をもたらすかもしれないような、そんな重大な行為であるという自覚のもとに行ったのだ。だから佐川一政がパリで、オランダ娘が羊よりうまいかという好奇心と性的フェティシズムから行った食人と同レべルで、この問題を捉えては断じてならないのだ。

使徒たちは聖餐によって自らの身体に聖霊が宿り、その聖霊の力で世界を変革できるという思いを持っていた。だからほふられたイエスが肉体を備えて自分たちの前に現れるとは予想していなかった。イエスの生前の復活予告にもかかわらずである。だからマグダラのマリアやクレオパの報告にもかかわらず、妄想だと取り合わなかったのである。

ところが食事によって、イエスと自己自身の区別の喪失、イエスと仲間の使徒との区別の喪失を体験する。はじめはちよっとした気の迷いか、白昼夢に思えたかもしれない。イエスは身の内からも語り出し、仲間が話をしていると思ったら、その仲間自身がイエスと自分との区別をなくして、イエス自身の如く語りはじめると、いつしか復活のイエスが生々しく語っているのだ。

もちろん復活のイエスが、「ヨハネによる福音書」のように使徒トマスに**「あの方の手の釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない」（二十章24節より）**と言われて、槍の突き刺した穴だとか、釘が打たれた手足の傷跡などを示したことはあり得ない。福音書の記述がすべて真実というわけではないのだから、福音書と合致しないことでわたしの仮説が誤っていることにはならない。

それより、どうして福音書はその記述を入れたのか。「ヨハネによる福音書」といえども、生身のイエスに対する聖餐の事実は否定しておかなければならなかったからである。生々 しい聖餐の言葉がある「ヨハネによる福音書」だけに教団から、そういう注文をつけられたのかもしれない。

**第七章　聖餐式（エウカリスティア）の神学**

**はじめに**

この章ではキリスト教会で行われる礼拝の中心儀式である聖餐式について、キリスト教神学でどのように位置づけられてきたのかを検討する。聖餐式はギリシア語では「感謝」を意味する「エウカリスティア」という言葉で表現されるので、聖餐式に関する神学をキリスト教では「エウカリスティアの神学」と呼んでいる。

**画像はペトロ・ネメシェギ神父**

この神学の分野は、礼拝の中心的儀礼に関する神学であるだけに古来さまざまな捉え方がなされている。それを検討することは、キリスト教会がこの二千年近くの間、こだわり続けてきたことが何であったのかを浮き彫りにすることになるのではないかと思われる。そのかっこうの材料を提供してくれるのが『新力トリック大事典』（上智学院新カトリック大事典編纂委員会編、研究社刊）におけるネメシェギの文責になっている「エウカリスティア」という項目である。これを素材にこの章は展開する。

この項目は 『新カトリック大事典』 の七四一頁から七五一頁にかけてほぼ十頁分にわたって、非常に細かい字でびっしり書かれたものであるが、聖餐式がイエス・キリストの肉を食べ、血を飲む儀式であるとしながら、パンがキリストの肉であり、ワインがキリストの血であることの説明に終始して、本当のイエスの肉と血を使徒たちが聖餐したという原事実に関しては、堅く口を閉ざしている。そういう疑問が議論されたという形跡すらない。

もしパンやワインを食べる聖餐式の意義をイエスとの一体化として極めて神聖な行為と考えるなら、イエスの肉と血を食した使徒たちの行為は、それこそウルトラ神聖な行為である筈だ。だとすれば、それが行われたのではないかという期待から、福音書を読み直し、わたしが提起している仮説に到達しても良さそうなものである。

もちろん福音書などは、カニバリズムが絶対的なタブーになっているユダヤ人社会にあって、イエスの肉と血に対する聖餐を歴史的事実として記録することは出来なかった。ローマ世界においても、キリスト教の復活信仰の起源がカニバリズムであると知れわたれば、猟奇的な宗教として排斥され弾圧の口実にされただろう。

実際に初期キリスト教徒は入信に際する儀式で、子供を殺して共食していたというあらぬ噂を流されて、弾圧のロ実にされていたのだ。にもかかわらず、キリスト教会では、「人の子の肉を食べ、血を飲む」聖餐式こそが、礼拝の中心になっていたのである。また礼拝全体が聖餐式つまりミサと呼ばれてきたのである。

実際に食べているのはパンであり、ワインであるにもかかわらず、イエス・キリストの地上における体である教会の中では、パンはイエスの肉になり、ワインはイエスに血になるという。だがだれが考えても分かるように、パンはイエスの肉にならないし、ワインはイエスの血にはならない。

プラグマティズムの創始者パースは、聖餐式で聖別されたパンを食べるとパンの味や歯ごたえがする。それは決して肉の味や歯ごたえではない。パンの味や歯ごたえがするものをパンと呼ぶので、肉の味や歯ごたえのしないものを肉と呼ぶのは間違いだと指摘した。

パースのこの指摘は、超越神論の立場からも当然である。イエスをパンやワインという物と同一視するのはイドラトリィ（偶像崇拝）であり、パンやワインという物を勝手に聖別するのは人が物を神にするフェティシズムに他ならないのだから。

つまりイエスの身体というのは歴史的な身体であって、歴史的に一世紀の前半の三年間程をメシアとして活躍して処刑された身体である。だからその身体が同時に後のキリスト教会でもあったり、その中でのパンやワインでもあるなんてことは絶対あり得ない。それを後からいろいろ神学的に理屈をつけてみたって、同じである。ということはそういう理屈付けに情熱を燃やして、イエスの肉と血を食べ続けていることにしなければならない事情がミステリアスなキリスト教徒のコンプレックスとして隠されているのである。

フロイトの精神分析学を適用すれば、これは合理化である。自分たちが原行為において行ったことを繰り返して、この原行為が必然的でしかも正当であり、神聖であったことを主張しているのだ。

キリスト教徒たちはパンを食べながらイエスの肉を食べているといい、ワインを飲みながらイエスの血を飲んでいると言っているのであるから、キリスト教徒たちは極めて正直に、イエスの肉を食べ血を飲んだ行為を正当で神聖な行為であったと、繰り返し、繰り返し二千年間にわたって主張しているのである。

もちろん精神分析学的にはそのようにしか分析できないことが、そのままイエスの肉と血に対する使徒たちの聖餐の絶対的な証拠になるわけではない。とはいえキリスト教会における聖餐式から、イエスに対する使徒たちの聖餐があったという仮説を立てるのは、精神分析学からは当然のことなのである。

**１最後の晩餐について**

ネメシェギは、最後の晩餐のパンとワインを弟子たちに与えることが、**「自分が救いのいけにえとなることを単に示すだけではなく、パンとぶどう酒を自分の体、自分の血といい、それを弟子たちに食べさせ、飲ませる」「イエスは自分をことごとく与え尽くし、新しい契約のいけにえとして弟子たちに食べさせ、飲ませる、それによって彼らは、イエスにおいて体現された新しい契約に入れられる」**と述べている。

これは全くもって不思議な論理だ。イエスは確かに、これはわたしの肉であるとしてパンを与え、わたしの血であると言ってワインを飲ませたが、実際に、彼の肉を食べさせたわけでも、血を飲ませたわけでもない。すこしもいけにえにはなっていないのである。「イエスは自分をことごとく与え尽くし」というがとんでもない、何も与えていないのだ。

ネメシェギは、続けてこう述べている。**「四福音書にみられるようにイエスの言葉には、述べる事を実現する力があった」**ということは、その時はまだイエスはいけにえになっていなかったけれど、後に十字架にかけられるのでいけにえになる。だからパンはいけにえのイエスの肉、ワインはいけにえのイエスの血となる。そしてイエスの言葉は特別で将来のことを先取りして、いけにえになる前のパンやワインも同じ新しい契約に入れる力があるということになるのだろうか。

ネメシェギは「ルカによる福音書」の「わたしの記念としてこのように行いなさい」という言葉を、モーセによる過ぎ越しの記念祭に代わる、新しい契約の記念祭として捉えている。たしかに最後の晩餐がモデル化して聖餐式（ミサ）が行われるようになる。でもイエスの真意はそれだけではなかったのではないか。

**「このパンはあなたがたのために与えられるわたしの体だ」**とイエスが言ったのは、これから十字架が待っていると確信しているからである。「ヨハネによる福音書」では、かつてカファルナウムで**「わたしは命のパンだ」**とイエスが宣言したとき、彼は自分の肉体の代わりにパンをちぎって、これが私の肉だといっただろうか。これから十字架が待っている男が、パンをこれがわたしの体だといって、食べさせ、わたしの体はあなたたちに与えるから、このように食べるのだよと言ったら、それは一体何を意味しているのか、小学生でも分かるのではないか。きっと恐ろしくなって逃げだすだろう。

わたしは今少し表現を変えたが、それは意味がはっきり通じるようにであり、決してイエスの言葉の趣旨は変えていないと思う。じっくり考えて欲しい。

わたしはイエスの熱い思いを伝えたいのだ。彼は本当に自分の肉を食べさせ、血を飲ませて、聖霊を引き継がせたかったのではないのか。「さあパンを食べなさい、このようにわたしを食べるんだよ。さあワインを飲みなさい、このようにわたしの血を飲むんだ。そうすれば聖霊は引き継がれ、あなたの中でわたしは生き、永遠の命であるわたしによってあなたは生きるんだ」こうイエスは切実に訴えたのではないか。

わたしはそれこそ心底からの魂の叫びであった気がする。そうであるからこそ、イエスは復活したという信念を使徒たちに与えることができ、これがキリスト教団を確立して世界史を二分したのである。だからこれを取り違えたら、世界史の真実は見えてこないのだ。

ところが後世のキリスト教徒は、パンとワインのフェティシズムに聖餐をすり替えてしまったのだ。わたしは決してパンとワインのフェティシズムがチャチだと言っているのではない。パンとワインの中に永遠の命を見いだすのなら、それも素晴らしいことだ。ただわたしが残念に思うのは、イエスの魂の叫びが隠蔽されていることなのだ。

**２パウロとヨハネの聖餐思想**

「主の晩餐（聖餐）」についてのパウロの思想を、ネメシェギはこうまとめる。

**「パウロにとって主の晩餐は、復活した主イエスの死がもたらす救いの力（人類の贖罪の事ーやすい）を信者にもたらし、受けた救いにふさわしく生活する義務を彼らに負わせる儀式である。そして、主の晩餐で裂かれたパンをふさわしく食べ、賛美の杯を飲む信者は、イエス自身の体と血にあずかり、キリストの一つの体である教会となるのである。」（七四二頁右）**

パウロは、ユダヤ教徒としてキリスト教徒を弾圧していたが、復活のキリストに遭遇して回心してキリスト教徒となり、大活躍の結果使徒として認められた。

だからパウロの前に現れた復活のキリストは聖餐の結果ではない。彼が迫害し、痛めつければつけるほど、本当なら自分を憎み恨む筈のキリスト教徒たちが、イエスの「山上の垂訓」の通り、憎しみに対して愛を返し、迫害する自分の為に祈ってくれた。このキリスト教徒たちを憎みきれず、ついに愛するようになり、良心の呵責が募り募って復活のイエスの白昼夢を見たのである。

彼にとってはイエスが生きて現れたという体験が重要だった。イエスに敵対するかイエスの側につくかの二者択一をした彼にとって、聖餐はイエスの体を取り込み、イエスに繋がれることを意味していた。だからキリスト教団というイエス共同体に属していて、同じパンを食べ、ワインを飲むことも、一つの命につながることである。イエスの福音を伝えることもイエスによって生きることだから、イエス自身の体と血に与ることでもあるのだ。

次に「ヨハネによる福音書」の思想はこうまとめられる。  
  
**「主の晩餐を行う人々は、父なる神から遣わされて天から降って来たイエス、すなわち、受肉した神の永遠のみことば（ロゴス）であるイエスを信じて、世のいのちのために犠牲になったイエスの『肉と血』（すなわちイエス自身）を食べ飲むことによって、イエスと永久的に一致し、御父から御子イエスを通して与えられた永遠のいのちを受けるのである。」（七四三頁左）**

「ヨハネによる福音書」では、イエスの肉はイエスの言葉の比喩でもあり、イエスの言葉を信仰することはイエスの肉を食べることの比喩でもある。そしてイエスの聖霊は、永遠の命であるから、イエスの肉を食べ、血を飲むことでそれに与ることができるのである。



ということはその事を信仰した聖餐派の弟子たちがイエスの許に残ったので、イエスの十字架に当たっては、聖餐が行われた可能性を認めることになる。しかしネメシェギはミサで、パンやワインを食することをそのままイエス自身を食べ飲むことと解釈しているだろうから、わたしの仮説を支持することはないだろう。

**３古代キリスト教団における聖餐**

古代教会においては、エウカリスティア（感謝）の祭儀は日曜日毎に行われていた。それは、洗礼を受けた敬虔な信徒が、イエスの言葉で聖別されたパンとワインの形でキリストの体を食べ血を飲む儀式だった。彼らはこの儀式で永遠の命に繋がるので「不死の薬」であり、イエスにあって生きるための解毒剤と表現していた。

**「パンの像をもってキリストの体が与えられ、ぶどう酒の像でもってキリストの血が与えられる。」（七四三頁右）**

ミラノの司教アンブロシウスは、祝福の力は自然の力よりも強く、キリストの言葉は諸元素を変えるとしている。だから司祭が「これはキリストの体である」と言えば、「アーメン（その通りです）」と答えなさいと教えたそうである。

**画像はミラノの聖アンブロシウス像**

[](http://wahei.blog-niigata.net/.shared/image.html?/photos/uncategorized/2009/12/07/p1020338.jpg)二世紀末のアべルキオスの碑文には**「パンとぶどう酒を友人に配る清い乙女（＝教会）から大きな清い魚（イエス・キリスト）を与えられる」（七四三頁右）**と書かれてあった。このように信徒はイエスの体を食べることで永遠の命を得ようとして、エウカリスティアの祭儀に参加していたのである。

しかしたとえパンがイエスの体であったとしても、それを食べたからといって永遠の命を得られる筈はない。イエスが聖霊を宿し、永遠の命であるのは、彼の言葉が人々の魂を揺り動かし、トーラーの呪いから人々を解放して、愛に生きる道を説いたからである。

大いなる命（神）への愛と隣人への愛に生きるならば、我々 は自らの命を捧げ尽くして、充実した生を燃焼しつくすことができる。そしてその魂は大きな感動を与えて、燃え広がる。この命の燃焼の中で大いなる命との一体感を得たとき、我々 は、個体的には滅んでも、自己自身として永遠の命を感じることができるのだ。

パンもワインも我々にとっては命の糧であり、命の一つの形である。命はすべて一つの命の現れでもあるから、パンもワインもイエス・キリストだというのは深い汎神論的真理性をもっている。

しかし自ら〈永遠の命〉に生きようとしていないのに、イエスの言葉によって聖化されたと言われるパンを食べても、何の足しにもならないのだ。

イエスの言葉は魂を揺り動かし、その言葉に触れた人が愛に生きてこそイエスの言葉なのであり、同じ言葉でもただ儀式的に繰り言されるだけでは、真の意味でイエスの言葉ではないのである。

イエスの十字架は神にささげられたいけにえであるとされる。全く罪のないイエスが十字架につくことで、人類の罪を帳消しにしたとされているからだ。

しかし同時にイエスは人間に自らの肉と血を捧げ尽くし、それによって信徒はイエスと合一する。そのことで信徒全体が神への奉献となるとしている。これを行っているのが、アウグスティヌスによるとエウカリスティアの祭儀なのである。  
**画像はアウグスティヌス像**

この奉献というのは、聖なる交わりによって神と一致するために行うすべてのことなのだ。「人の魂が神への愛に燃え、自分を神に向けるとき、その魂は捧げ物になる」このアウグスティヌスの教えが奉献で意味しているのは、全てを投げ出して捧げ尽くして愛に生きるということである。

エウカリスティアの祭儀は、こうしてキリストの体である一つの命のパンに合体することである。アウグスティヌスは燃える思いでこう語ったそうだ。

**「パウロはこのバンを説明して 『私たちは皆一つのパン、一つの体である 』といっている。ああこれこそ敬愛の秘跡、一致のしるし、愛のきずな、生命を得ようとする人は、生きる場をもっている。いのちを汲み取る源をもっている。近づきなさい。信じなさい。生かされるために、（キリストの） 体に合体しなさい。」（『ヨハネ福音書講話』）（七四五頁右）**

これはすごい言葉だ。近代国民国家を超克して人類の統合が新たな段階に進もうとしており、地球環境問題に触発されて漸くガイヤ（生命としての大地＝地球生命）の叫喚に気づき始めている時、胸に深く突き刺さってくる。

****われわれは根源的な大いなる命の現れであり、一つの体なのである。そのことは愛に生きて己の体を捧げ尽くすことによってはじめて感じることができるのだ。そして自分たちの為に命を捧げ尽くしてくれた命のパンを食べ、その魂（＝命）に触れて、その命によって生かされていることを感じたとき、われわれ自身が自らを命のパンとして棒げ尽くすことができるのである。

われわれは自然界の日々の営みの中に、これを見ることができる。惜しみなく愛は奪い、愛は与えている。そうして生命の循環が成立しているのだ。そしてまさしくこの生命の営みこそ、永遠の生命に他ならない。

ところがわれわれはこの永遠の命、生命の循環から離れ、大いなる命の愛を受け取ることも、自らを捧げ尽くして愛のパンとなることも忘れている。命から離れたところに本当の生きる喜びも、命の充実もない。聖餐に与って死なないことを願っても、自ら命を捧げ尽くし、命のパンとなることは願わないのだ。それでは真に生きることはできない。

イエスが敢えてみずからの肉と血を食べさせようとしたのは、そのことに気づかせる為だったのだ。そのことを離れて、イエスの肉と血に何の力もあるわけはないし、ましてや聖餐のパンやワインなどナンセンスなのだ。

古代教会はプラトン哲学を援用して、聖別されたパンとワインがイエスの肉と血であることを説明したようだ。

**「プラトン主義によれば感覚的なものはすべて、精神的な真実在（イデア）の像であり、その実在に参与している。このような思想を用いてエウカリスティアを考えると、聖別によって死んで復活したイエスの像になったパンとぶどう酒は、イエスの実在に参与しているといえる。中世・近代の人々の思想とは異なリ、古代人にとって『像』と『真実在』は決して相反する概念ではなかった。感謝の析りがその上に唱えられたパンは、キリストの体の像であるからこそ実際に、キリストの体なのである。」**

このプラトン哲学の援用は幼稚だ。感覚的なものがイデアの像であるといえるのは、イデアを含むからである。パンがイエスの像であるのは、双方とも身を捧げ尽くして命を養う食物であるからだ。

ところで身を捧げ尽くして命を養う食物にはいろんな物があるのだから、そういう場合は、パンが特にイエスの像であることにはならない。だからパンを食べても決してイエスを食べたことにはならないのだ。

もちろんイエスの体を食べることが救済の条件だとしたら、イエスの聖餐を行った可能性のあるごく少数の使徒以外は、だれも救済されなくなってしまう。だから直接イエスの肉と血の聖餐ができない者にも、イエスの体を食べさせることが可能な論理が必要だ。それで司祭によってイエスの言葉で聖別されたパンがイエスの肉となり、ワインがイエスの血になることにしたのである。

こうしておけば、エウカリスティアに参加するキリスト教徒は全員救済されることになる。ようするに超越神論では肝心なことは、聖霊の実体性である。この聖霊としてのキリストがどういう身体を備えて現れるかは、それに比べれば重要ではない。歴史的イエスの身体だけで収まらず、超歴史的にパンやワインとして現れても構わないのである。

四世紀になり、ローマ帝国で国教化すると、イエスの神性はますます強調され、畏敬の念が強くなったので、エウカリスティアでイエスの肉と血を食することは相当の覚悟が必要となり、聖体の拝領を遠慮するようになったようである。

ビザンチウムの東方教会ではエウカリスティアのことを「畏るべき秘儀」と呼んだのだ。いわば聖体は、エデンの園の「命の木の実」である。それを食べれば永遠の命を得ることが出来るというのだから。神はアダムとエバが「善悪を知る知恵の木の実」を食べたのを知って、「命の木の実」まで食べるのを恐れて、二人を「エデンの東」に追放したのである。  
  
　だから聖体拝領はそれ自体もともと、神を食べることやカニバリズムを禁じたトーラーに反するタブーなのであり、あえて自ら肉と血を与えようとしたイエスは、自らの全てを捧げ尽くすことを代償にこのトーラーを乗り越えようとしたのである。

**４中世のエウカリスティア**

中世においても東方教会は畏敬の念がますます強調されたが、西方教会ではエウカリスティアをミサと呼んで、ミサへの出席を信徒に義務づけた。しかし聖体を拝領する者はごくわずかだった。そこで年に一度は聖体を拝領することを義務づけたのである。ところでミサはラテン語で行われたので、ラテン語のわからない一般民衆は参加できなくなっていった。そこでミサは聖職者だけの営みになっていき、信徒からはミサ奉納金を集めて、司祭がミサを捧げるようになっていった。また信徒が参加しても聖体の拝領に止め、聖杯を遠慮するようになったそうだ。その理由としてネメシェギは伝染病の感染を恐れたかもしれないとしている。

古代の三世紀までは、まだキリスト教は民衆の自発的な宗教運動の面があり、聖体拝領によるイエスとの合一によって、救われることを心から願っていた。

だが中世では、教会制度自体が支配機構であり、ラテン語で意味不明の祈りを聞かされ、無理やりミサに参列させられたようである。それでパンを食べ、ワインを飲むことが、イエスの肉を食べ血を飲むことだと聞かされれば、何か得体の知れない恐ろしい儀礼のような受け止め方をしたのではないだろうか？

実際「人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、永遠の命は得られない」という言葉は、実践的には人の子の言葉と全てを捧げ尽くす生き方に感動し、それらを血肉化しなければならないという意味で受け止めればよい。だから別にパンやワインを身体に入れなくても、二つの愛に生きれば、それだけで十分救済される筈である。言い換えれば、いくら聖体を拝領しても、二つの愛に生きているのでなければ、キリスト者とは言えないのである。

中世では、像と実在は相反する概念と考えられるようになり、パンはキリストの像だから、パンを食べることはキリストを食べることであるというのは説得力がなくなった。十一世紀に神学者べレンガリウスは、**「エウカリスティアのパンはキリストの体の像にすぎず、実体的にはキリストの体ではないと説いた。」（七四六頁左）**このいわばシンボリックな解釈は、神学者たちの圧倒的な反発によって孤立してしまった。

[](NULL)**画像は現在もさかんな「聖体行列」みんな参加するので町はもぬけの殻。**

そして一○七三年のローマの教会会議で自説の撤回を宣言させられたのである。**「パンとぶどう酒は、析りとキリストの言葉によって、キリスト自身の真の肉と血に実体的に変化する」（七四六頁右）**と神学者べレンガリウスは認めたのだ。この論争で聖別された聖体に対するフェティシズムは極端になり、豪華な聖櫃に安置されたにとどまらず、ついには路上を練り歩く「聖体行列」まで登場したというのだから呆れ果てる。

おまけに「キリストの聖体の祭日」まで造られたのだ。しかし実体的に変化したのなら、パンはパンの風味や感触を失い、イエスの肉の風味や感触に変化しなければならない筈だ。実体的に変化していないから、パンはパンのままなのではないか。

そこでトマス・アクィナスは、『神学大全』でアリストテレスの「実体」と「付帯性」の区別を採用して、この疑問に答えてくれている。

**「キリストの代理者として司祭が聖別の言葉を発するときに、神は全能の力を働かせて、パンの実体を、すでに存在しているキリストの体の実体に、ぶどう酒の実体をキリストの血の実体に変化させ、パンとぶどう酒の付帯性をそのまま存続させる。こうして何の変化も被らないキリストの体と血は、実体の存在様式に従って、パンとぶどう酒の付帯性（あるいは形色）の全体のもとでも、またその各部分のもとでも、全体として存在するようになる。しかもキリストの体、血、魂、神性は不可分であるので、キリストの体があるところには、キリスト全体が存在するし、キリストの血があるところにも同じくキリスト全体が存在する。」**

イエスを愛の権化であり、永遠の命のパンであるという規定で捉えるなら、それは歴史上の一個人の身体を超えて、我々 の日々の食事にも現れる筈だし、精神的な栄養も含むならば、様々な人々の生産や文化や生活の活動も、あるいは大自然の営みでさえ、永遠の命のパンとしてのイエスであると捉えられるだろう。

ところがキリスト教会はこれを聖別の言葉による「実体変化」に限定するのである。これでは二つの愛の実践に救いがあるとしたイエスの立場を踏みにじり、救いの力を教会の祭儀に独り占めにするものである。イエスは最後の晩餐で、わたしを記念して行いなさいといったが、そのことでパンとワインがシンボリックに肉と血を表現したものではないとも、実体変化するものであるとも言っていない。むしろイエスを忘れない為の記念的行事に過ぎないのである。

**５宗教改革とエウカリスティア**

罪の無いイエスは十字架につけられて、犠牲となり、代わりに人類の罪をチャラにする贖罪を行ったと言われている。この一回の贖罪で人類の罪は許されているのだから、後はイエスが贖罪してくれたことを信仰して、イエスに帰依すればよいという考えを信仰義認説という。

宗教改革に際して、ルターたちはこの信仰義認説を強調した。それでエウカリスティアに関しても信仰義認説から、エウカリスティアを犠牲奉献と認めるのは間違いだとしている。あくまでも神の恩恵としてイエスの肉と血に与り、永遠の命に結ばれるとするのだ。

もし犠牲奉献だとすると、つまりイエスの贖罪の効果を認めないことになってしまっているというのだ。しかしこれは全くの甘えの論理である。イエスが人類の贖罪でありえるのは、イエスの十字架によって、キリストを十字架につけた自らの罪を自覚し、罪人の自分を滅ぼし、回生してイエスの言葉に導かれて「二つの愛」に生きてこそである。それが出来ないで相変わらず罪に生きているとすれば、人類は犠牲奉献を繰り返さざるを得ないことになる。

実際イエス以後も様々な形で人類は、第二、第三のイエスを登場させ、犠牲奉献を繰り返してきたのではないのか。改革派は、各国語で聖餐式を行うこと、祭司に聖餐を代理してもらえないこと、祭司だけでなく信徒にもパンとワインの二種陪餐を行うこと、聖体顕示や聖体行列は廃止することなどを実行した。

そしてキリストがパンやワインという形色で真に現存するかについてルターとツイングリが論争した。ルターは、中世スコラ学の実体変化説に代わるものとして「共在」説を採用した。聖別によって、外観ではパンとワインしか見えないが、キリストも現実にかつ客観的に共在するというのだ・それは信仰によって知られ、恩寵の力によって経験されると主張した。これは聖霊としてキリストが共在するというのなら、イエス自身のつきもの信仰に相応しい解釈である。

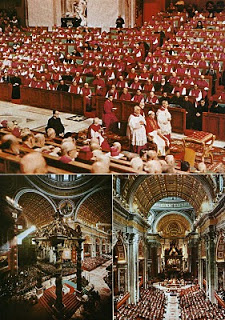
ツイングリは、パンやワインは単に記念としての意味しか持たず、イエスの肉と血をシンボリックに表現しているにすぎないとした。ツイングリのようにシンボリックに解釈した方が自然である。パンやワインを食したところでイエスの肉や血を食したことにはならないのは、当然のことだから。

そして人類のために全てを捧げ尽くしたイエスの犠牲によって、それを栄養に生きていることを象徴し、記念してパンとワインを拝領すればいいのである。ところがそれでは納得できない、どうしてもパンとワインを食することが、イエス自身の肉と血を食べることにしなければ気が済まないのが、カトリックの解釈である。

カトリックは一五五一年のトリエント公会議で従来の「実体変化説」を継承したのである。そしてラテン語のミサや犠牲奉献説などの従来の立場も堅持した。  
  
　　**６現代カトリック神学とエウカリスティア**

第二ヴァティカン公会議(一九六二～一九六五年)では、エウカリスティアの祭儀を「キリストの死と復活の記念祭」であり、新約の唯一の犠牲奉献を現存させ、その功を奏させるものであると宣言している。

だが神に捧げた筈のイエスの肉と血を、エウカリスティアの祭儀で実際に食べるのは信徒である。これが犠牲奉献の再現なら、歴史的身体としてのイエスの肉を食べ、血を飲んだという原事実を繰り返していることを言外に語っていることにはならないか。

もちろん福音書にある最後の晩餐は、パンとワインをイエスの肉と血に見立てたものだった。しかし最後の晩餐で犠牲奉献が行われたわけではない。それはあくまで予行演習にすぎなかった。イエスの犠牲奉献は、贖罪の十字架とその直後の使徒による聖餐にあったのではないか。これはわたしの仮説にすぎないが、この仮説を差し挟むことで、その後の二千年間のエウカリスティアの祭儀の意義が始めて鮮明になるのだ。

イエスの肉を食べ、血を飲むことはつきもの信仰に基づく聖霊移転行為である。この聖霊移転によって、イエスと使徒の間の垣根が取れて、同一視が起こり、イエス復活の原体験がもたらされた。それがキリスト教団の成立と発展を支え、世界宗教に成長する保障となった。しかしそれをもたらした原行為は、当時においてもその後の二千年間においても厳しいタブーに抵触する行為であり、その露見はなんとしても避けなければならなかったのだ。

ということは合理化のために、このタブー破りが正当で聖なる行為であったことを繰り返し中心儀礼の中で確認しなければならなかったのである。この中心儀礼こそイエスに対するパンとワインの聖餐であった。

では二千年間も繰り返しイエスの聖餐を繰り返したのは、原事実としての「最後の晩餐」のパンとワインの聖餐を合理化していたのか。断じてそうではない。パンとワインの聖餐はタブー破りでも何でもない。もちろんわたしの仮説であるイエスの生身の肉と血に対する聖餐行為こそが最大のコンプレックスの原因であったのだ。

もし生身の肉と血に対する聖餐行為がなかったとしたら、パンとワインをイエスの肉と血として信仰するフェティシズムを、どうして二千年間も中心教義として堂々と続けてこられるのか。だからわたしは言いたい。もう十分だ。何も恐れることも悔やむこともない、それは猟奇的なことでも変態的なことでもなく、イエスの復活信仰をもたらし、世界宗教としてのキリスト教を確立するためのイエス自身の宗教的な聖なる行為だったのだ。

イエスも彼の使徒たちもイエスの肉を食べ、血を飲むことによって、聖霊が復活すると信仰していたのである。だからそういう方法しかなかったのだ。そしてそれはイエスの愛を見事に表現していたではないか、彼は命のパンとして彼の肉と血をすべて捧げ尽くしたのである。

もしそうしなかったら、使徒たちの胸にあれほど激しくイエスは己を刻印できただろうか。イエスの十字架は、イエスの勝利の印としてではなく、イエスの限界を示すものとして使徒たちに総括され、愛に生きたイエスが世に裏切られた悲劇的な使徒たちの思い出に終わったのではないか。復活信仰なしにはキリスト教の成立は語れないのだ。

復活は神の力だという理解がある。では何故イエスに対する聖餐が中心儀礼になったのか。メシアを食べるというパフォーマンスが、超越神論の宗教儀礼の核に座ったのはどうしてかが問われる。メシアを食べるというパフォーマンスが実はイエスの復活をもたらしたのだ。だからこそ「教会はエウカリスティアの祭儀を行うとき、聖霊の力によって死と復活に合流する」のだ。現代においても、聖餐によってイエスは信徒の肉や血になり、また聖霊として体内に入ると考えられている。そしてそれが行われる教会によって一つの命のパンに連なると信仰されているのである。だから原行為としてのイエスへの聖餐を現在でも無意識の内に、祝福し、聖化していると解釈するのは精神分析学からは当然なのである。